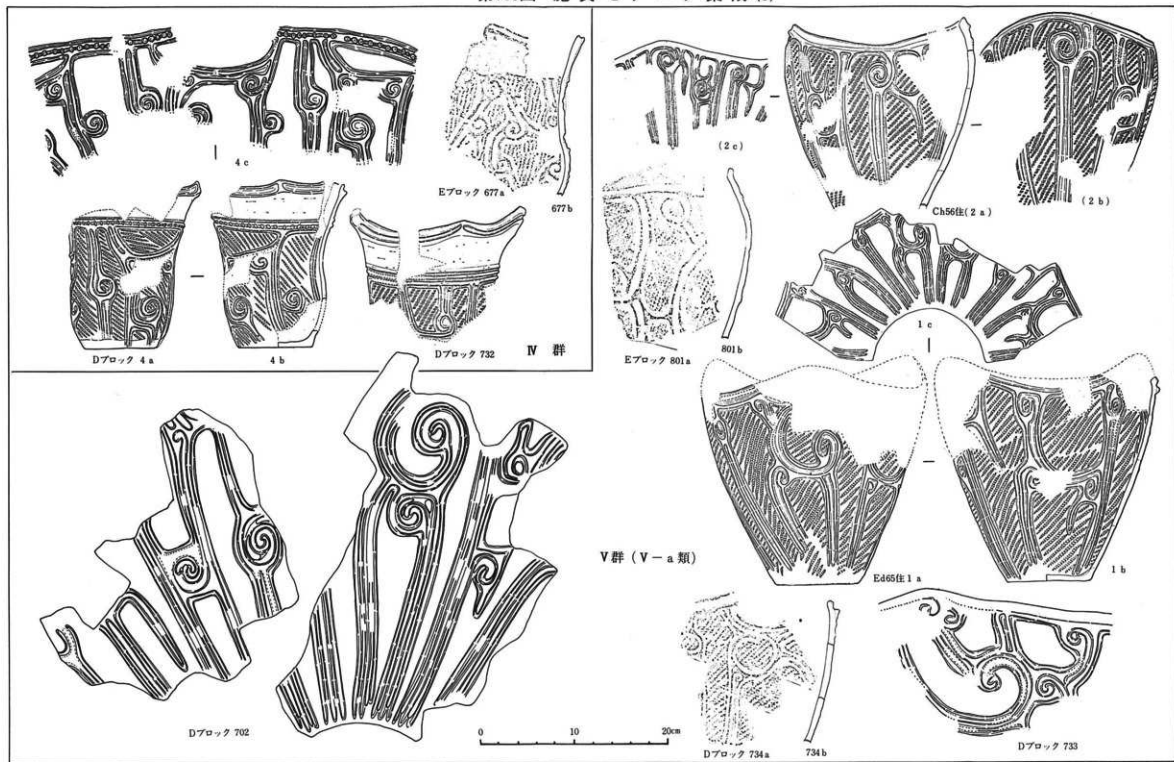
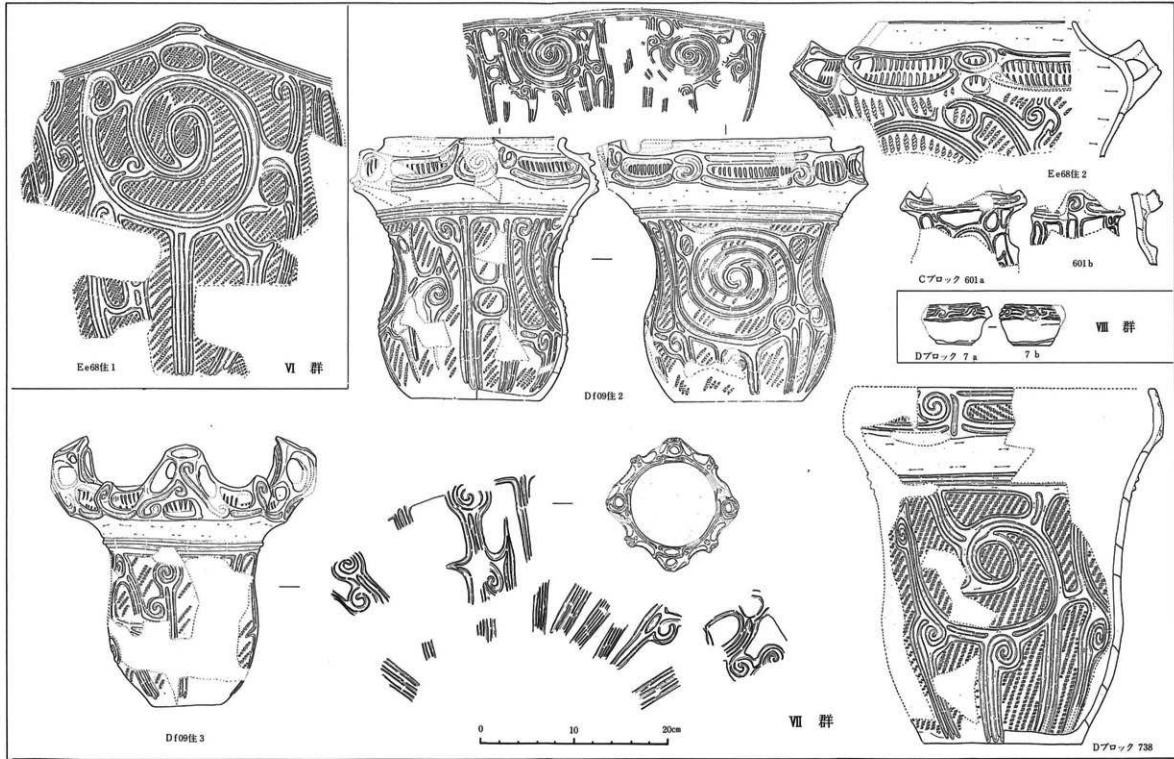


第159図 施文モチーフ集成 (3)



第160図 施文モチーフ集成図(4)



(き) 胎土・焼成について、使用された素地は極めて粗なものが大部分である。石英その他の粗粒が多量に含まれている。これは土器に限らず、土製品全般に共通する傾向である。Ⅲ群とⅣ群土器の一部に、例外的に精良な胎土を有するものが存在する程度である。器種と使用胎土の精粗との間に明白な対応関係は無いと思われる。加飾の度合のもっとも高いⅦ群土器の胎土もⅠ・Ⅱ群のそれと大差ないのである。

現状の焼成は不良ではないものの、粗な胎土のせいか現状ではザラつき、脆い感じのもののみである。上述のⅢ・Ⅳ群の一部は硬質な感じがする。また現状の器面の多くに、あたかもビック様のもので敲打されてきたかの如き凹部、剥落部が認められる。その成因は現状で不明であるが、本遺跡出土資料の一特徴としておく。

(ク) 煤様のものの残存について、煤様のものがその外面に確実に認められるものをあげると、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(㉔・㉕の大・中型品?)Ⅴa群などとなる。Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ群にはほとんど認められない。したがって煮沸用具としての機能と、それ以外の機能をもつものの器種・器形が異なっていた可能性もある(勿論Ⅸ群の浅鉢的なものの存在も看過してはいない)。これも本調査出土土器の大半が組みあわせとして存在した可能性があるとする解釈の根拠である。

器内面における煤様のもの、炭化物の残存状況が検討が、その機能推定の資料になしうるとは諸先学の指摘するところである。本資料にもその種の検討を若干加えたが、あまり明白な特徴は指摘できない。良好な資料も少ない。

④ 石器 (㌿) 石器類の組成と組成比率について (第3・4表)

石器の器種別の特徴は既述のようなものであった。次に器種の組みあわせ(組成)とその比率(組成比率)を検討し、石器類記述のまとめとしておく。対象には今次調査で得た全資料を用いる。既にふれたとおりこれらの資料の殆んどすべてが縄文時代中期中葉末頃に属すると思われる、ほぼ単期のもののみなされてよいからである。Ⅲ層における出土状況も時間差をほとんどたないものであった。

(い) 器種組成 第1類から第24類までに区分したが、うち1・2類は素材関連のものであり、厳密には石器の仲間には入らないことは既にのべた。また22~24類は、その中に狭義の生産用具となる可能性のあるものを含むが、大半は所謂信仰関連のものと思われるものである。したがって最狭義・直接的な生産用具は第3類~21類までということになろう。勿論、食料獲得経済的な色彩の濃厚な段階であったと思われる縄文時代にあつては、信仰・儀式も極めて重要な生産活動の一分野であつたろうことは容易に想像しうる。その意味で22類以下の存在する事実は当然ながら重視されてよい。

次により直接的生産の場において用いられたと思われる第3類~21類の内容を検討しておく。

第3類は唯一の刺突具、5類～10類は利器（搔器・削器・切器）、11類～14・16類は打割・打削・掘削具（16類は用途が比較的限定されていたと思われるが、その他は複数の用途に用いられた可能性がある）、15類・17類はやや疑問はあるが敲打的用途に供された（槌石など）もの、18類は研磨用具、19類～21類は摩・擦・播具的なもの、とそれぞれ区分しようと思われる。狩猟・漁撈の分野、各種の生活用具生産・消費の分野、植物的資源関連の分野などにおいて用いられたものであろう。縄文時代の生産様式をほぼ忠実に反映した組成といえよう。ただしより直接的な漁具関連石器（石錐など）が欠如している。

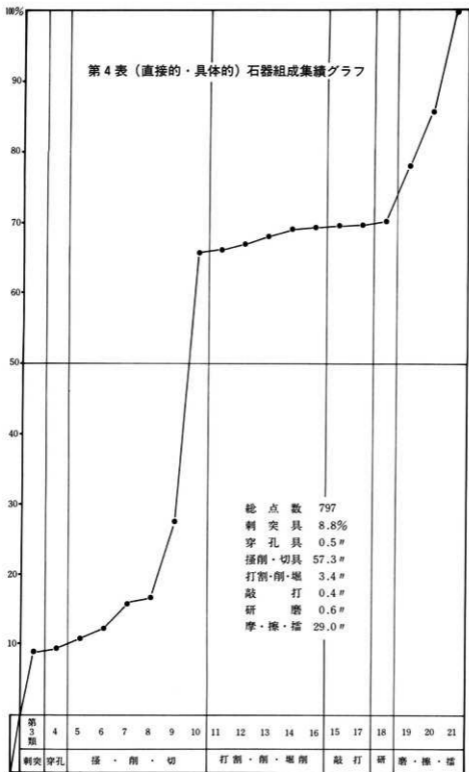
(ii) 組成比率 以上の組成の存在比率を見ておく。高い方から順にあげると、搔・削・切具57.3%、摩・擦・播具29.0%、刺突具8.8%、打割・削・掘削具3.4%などとなる。この比率も先と同様に、縄文時代中期の労働の内容・分野を、極めて良好に反映したものと見えよう。縄文時代人の食料資源・エネルギー源において植物質食料の占めた比率が高かったことが指摘されている（註）ことを考慮すると、摩・擦・播具29%のもつ意味はさらに明白になる。搔・削・切具が57.3%と過半数を占めていることは、刃物として用いられたであろう故の高い消耗度を反映しているとも見ることができよう。第9・10類のようなものが多数を占めている点もその事情を物語るものとするのもできよう。打割・削・掘削具類が3.4%とやや少ない感じを与えるが、この種石器が破損後も再度刃部などを付されて道具として再生される頻度の高いものであることなども考慮すべきかと思われる。

以上を縄文時代中期中葉～後半の石器組成・組成比率の一例とし提示しておく。

註 鈴木公雄、2 縄文時代論、日本考古学を学ぶ（3）原始・古代の社会 有斐閣選書 有斐閣 昭和55年

第3表 石器組成一覽

	第1類 （原 石）	2 （黑曜石）	3 （ 鏃）	4 （ 鏃）	5 （ 皮はき）	6 （ 石 度杖）	7 （ 定形 的）	8 （ 塊り 入り）	9 （ 両刃 不定形）	10 （ 片刃 不定形）	11 （ 打 製斧）	12 （ 磨 製斧）	13 （ 両 刀）	
数	3	6	70	4	13	13	29	8	87	307	3	6	9	
比率	0.4	0.7	8.3	0.5	1.5	1.5	3.5	1.0	9.5	36.5	0.4	0.7	1.1	
用途	素材	刺突	穿孔	搔・削・切							打割・削・掘削			
数	—	70	4	457							27			
比率	—	8.8	0.5	57.3							3.4			
	第14類 （片 刀）	16 （ 鏃）	15 （ 鏃 打）	17 （ 鏃 打）	18 （ 砥 石）	19 （ 石 磨）	20 （ 四 角石）	21 （ 磨 石）	22 （ 磨 刀）	23 （ 石 棒）	24 （ 磨 製品）			計
数	7	2	2	1	5	64	60	107	8	2	24			840
比率	0.8	0.2	0.2	0.1	0.6	7.6	7.1	12.7	1.0	0.2	2.9			99.0%
用途	打割・削・掘削	掘削	貼打	研	摩・擦・播				その他			計		
数	27		3	5	231				—			797		
比率	—		0.4	0.6	29.0				—			100%		



い) 石器組成の類例(第161図・第5表) 以下に、時期による石器組成の異同の類例を見ておく。類例としては本課が調査し、ある程度以上の個体数の出土をみ、さらに時期の明瞭なものを選択した。それぞれの立地・遺跡の性格などの条件の異同は考慮せず、上述の観点でもってした。それらは矢巾町大渡野遺跡最下層(早期後半ムシリI式前後)・紫波町西田遺跡の包含層(中期大木8a式・8b式)・石鳥谷町大地渡遺跡・衣川村東裏遺跡の4つである。後二者は通常集落に伴う遺物包含層出土であり、その意味で日常の生活を比較的直截的に反映していると思われる。大渡野も集落に伴う包含層ではあるが、石器生産の場でもあった可能性が高く、西田例は、一定の地域をカバーする「聖域・墓域」的な性格を持つ可能性が高い。従って前二者にはやや特殊な活動の反映があることは容易に予想できるが、一応後二者と同列に扱った。

各遺跡における石器出土の頻度とその組成比は第3-5表の通りである。本調査の当該遺跡の所属する中期を中心に若干の検討を試みると、既に先学により説かれてきたとはほぼ同様の傾向性を指摘できる。即ち

(i) 石槍・石鏃の占める比率が低いという現象。西田・大地渡ともに他二者の半分以下にしか過ぎない。逆に、晩期における鏃類の組成比と器形変異の豊富さも顕著な点である。

(ii) 搔器・削器・切器類に所謂非定形なものが目立つ点。早期の搔器には極めて高い定形性を看取できるが、中期のものは刃部を付した程度程度の「実質的機能」を重視したかの如きものが多くなる。なおこの種石器の識別には報告書による傾斜現象があると思われ、未だ流動的な段階である。同様のことは両刃石器・片刃石器・磨石等にもいえ、以上の石器の組成が大きく変化する可能性も大である。

(iii) 石皿・凹み石・磨石等の植物質資源対象とされる石器の比率が極めて高い点。これは(1)の裏がえしともとれる現象である。そして中期後半に顕著となる住居の炉の大型化(所謂複式炉化)の傾向と軌を一にするものとも見える。既に指摘されているような植物質食料の利用方法の反映である可能性が高い。

紙数の関係で詳述は避けざるをえないが、石器組成・その比率の変遷の検討も今後果たさるべき主題であろう。

注 大渡野遺跡 岩手県文化財調査報告書第32集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-II 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和54年3月

西田遺跡 " " 51* 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-VII " 日本国有鉄道建設工事局 昭和55年3月

なお、詳細については鈴木優子氏の教示をうけた。深謝する。

東裏遺跡 " " 55* 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-VI " 日本道路公団 昭和55年3月

(5) 使用石材について(石器に限定しないで) 遺跡において得られた石材類は第6表の通りである。これらは大別すると④岩石(①~③)、⑤鉱物(⑥~⑧)、⑨化石(⑩)になる。④は細別すると①堆積岩(①~③)、②火成岩(④~⑥)からなる。①は①泥岩、②粘板岩、③砂岩、④硬砂岩、⑤凝灰岩、⑥層灰岩などに細分しうるし、②は、⑦流紋岩、⑧安山岩、⑨閃緑岩、⑩斑岩、⑪玢岩、⑫黒曜石、⑬松脂岩などに細分できる。⑤の鉱物は⑭水晶、⑮玉髓、⑯鉄質石英、⑰滑石片岩からなる。⑨は珪化木のみである。以上を各器種と対照させて若干検討する。

(1) 泥岩類 3類~14類の各石器に用いられる。例外的に18類に1例のみ用いられる。したがってこれらは、広義の刃物の素材として選択・加工されていたことは明らかである。ただし珪質泥岩類が11~14類の打割・打削具にあまり用いられていないのは若干目立つ現象である。

(2) 粘板岩類 比較的広範な用途を意図されていたらしいが、22類への集中が顕著である。薄く割れ、研磨による加工が可能という性質が選択の理由であろう。他に利器類の6・13・14類に、さらに敲打と思われる17類にも若干量が利用されている。

(3) 砂岩類 類例が少ないので如何ともいい難いが、17・21類に用いられている。

(4) 凝灰岩類 もっとも変種に富む。流紋岩質凝灰岩類・泥質凝灰岩類の二者がとりわけ優越し、珪質凝灰岩類がそれに次ぐ。以上の三種は3~14類の広義の刃物的な器種に集中的に利用されている。ただし珪質と流紋岩質の類は、11・12類には用いられていない。

砂質・角礫・軽石の類は、18~21類に集中している。以上の2つの集中現象は、それぞれに特徴視されてよいものであろう。

(5) 層灰岩 類例が少ないが、16と20類に利用されている。既にふれた如くに、16類の2例がともにこの種なることは留意するべきかもしれない。

(6) 流紋岩類 9・10・13類に利用されている。刃物類への集中とも見える。

(7) 安山岩類 4種からなるが、いずれも18~21類に限定され、器種との対応関係がもっとも顕著なグループである。とりわけ複碑石安山岩と19・20・21類との関係が目立つ。

(8) 花崗斑岩 3個しかないが、いずれも21類であり、あるいは特徴視されて良いかとも思われる。

(9) 玢岩類 これも数量が少ないので問題であるが、12・15・20類に利用されている。磨製という技法に関連した器種に2個用いられている点は注意されても良いかもしれない。

(10) 黒曜岩 3類の破片1のみであり、製品としての存在が稀薄な点が特徴とも思われるが資料の増加をまちたいと思う。別にふれた産出地の追求が急務であろう。

(11) 松脂岩 3・9・10類など鋭利さを要求される器種に用いられている。

(12) 鉱物の玉髓・鉄質石英は上と同様に鋭利さを求められる3・9・10類に利用されている。

滑石片岩は22類への使用例が1つあるのみである。

(13) 化石の珪化木は17類への1例のみであり、詳細は不明である。

各石材の各器種への利用状況は大略以上の通りである。器種（その用途）により石材を選択利用している状況が明白であり、この種のテーマへの一資料として提示しておく。

最後に検出された石材の破片の数量比の多いものの若干をあげておく。複輝石安山岩（24.0%）・珪質泥岩類（23.8%）・硬質泥岩類（22.0%）・流紋岩質凝灰岩類（7.4%）・泥質凝灰岩類（5.1%）・珪質凝灰岩類（3.1%）などである。これらで直接的生産活動・労働の用具の大半は作成可能である。その他の石材がその他の二次的な用具の素材となっているといえよう。

(14) 石材の産出地について、同定された各石材の予想される産出地・供給源は第6表の右欄に示した。これによると、圧倒的多数のものは奥羽山地に関連することがわかる。したがって遺跡所在地と重複することになり、「在地性」の高い石材利用ということになる。具体的には奥羽山地から東方へ流下（本遺跡に南接）する葛丸川の川原の転石中より採集・利用されたものであろう。ただし「在地性」にも一定以上の広範をもつ地域を想定すべきことは言をまたない。たとえば、②の凝灰質硬質泥岩の一部には、決して近接地域とはいえない「零石川流域」に産出地が想定されているものも存在するからである。

北上川河東の北上山地に産出地が想定されるものも若干あり、それらは粘板岩ホルンフェンス・硬砂岩・花崗斑岩などである。

さらに複輝石安山岩の一部・複輝石安山岩熔岩などのように岩手火山群に想定されるものもある。

以上のことから、縄文時代中期の人々は、その居住地区周辺に石材の大半を求めつつ、種類によっては、若干遠隔の地に産するものをも利用していたということになる。その入手の具体的様相は現状では不明である。このような石材の利用状況、とりわけ縄文時代晩期におけるそれらの例に衣川村東裏遺跡がある。ここでは石材と同様、土器の素地粘土も、遺跡を含む一定の地域的広がりの中から選択採集、利用された可能性のあることも判明している（前出註）。

2 平安時代 (A) 遺構と遺物

C f-65住居跡 (第162~164図、図版17) (遺構の確認) 調査地中央や北寄りの東端近くのⅢ層上面に検出した。調査地内においては比較的高位部にあたる。

〔重複・増改築の事実〕そのいずれも調査においては確認できず、単期のものと見做しうる。

〔平面形・方向等〕長辺3.9m×短辺2.8m×深さ0.2~0.3mの東西方向に長い長方形をなす。短辺はほぼ磁北に一致する。

〔堆積土〕褐色~暗褐色系のシルト質土が、通常の堆積状況を示している。これらはⅠ・Ⅱ層に由来するものと思われ、自然な埋没状況を示すものといえる。D層(床面直上)は、炭化物粗粒・焼土などが多く混在し、床面上における人間の何らかの行動を反映するものである。

〔床面〕その面上に礫・炭化物(材)・焼土・遺物などをのせるが、後述の施設の存在する部分以外は比較的平坦である。貼り床などの事実は観察できなかった。所謂「堅穴住居の掘りかた。的な構築時の深目の掘り込みの痕跡も観察できなかった。既述の④は軟質でもあり、貼り床とは強弁しない。

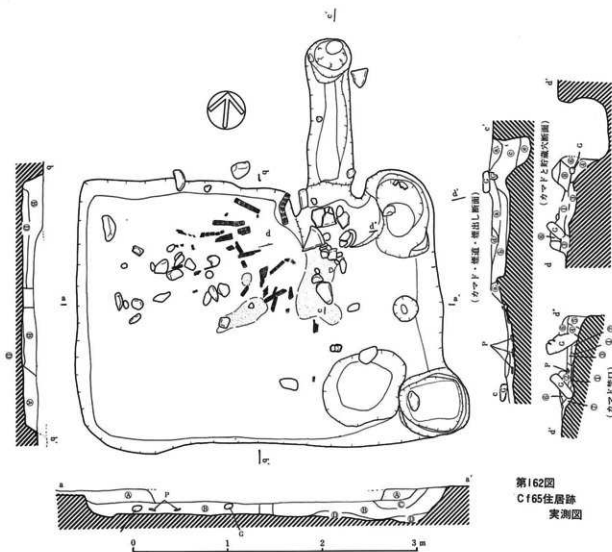
〔柱穴〕その可能性をもつ小ピットは東辺中央部付近に1個あるのみであるが、それも深さ0.17m程度ときわめて浅いものであり、疑問無しとしない。壁外周部にピット類は確認しえなかった。したがって柱穴の存在はきわめて影のうすいものであった可能性が高い。

〔カマド他〕カマドは北壁中央より若干東寄りに構築されている。袖部は壁削り出しではなく、Ⅲ層を用いての別個構築によっている。したがって燃焼部と煙道部境界には段が付き、それは北壁延長線上に一致するものとなっている。袖部には全体的に礫が見られ、それらを芯としたと思われる。カマド本体にあたる部分(さらには煙道部上位部)にも礫が用いられている点は、前代に比し特徴的である。燃焼部低面は若干凹みがつけられている。燃焼部には甕型土器が破損状態で検出されたが、カマド中に措えられたままの状態であったか否かは確認できなかった。

煙道部は既述の段から始まるが、その北隣部で再度一段深くなり、緩やかに深さを増しながら約0.9m北進する。北端の煙出し部との境界は若干高くなり、明瞭である。

煙出し部は上径0.5m×深さ0.4mをなし、煙道部よりは明確に深くなり、識別は容易である。煙道部との境界部上面に礫が認められるので、本来の姿は所謂「トンネル状」を示す連結状態であった可能性が高い。しかし、その構築法は、いったん両者を連結する溝状のものをつくり、その後天井部を構築するという手順となろう。

〔その他の施設〕周溝は明確な形では残存していなかったが、部分的ながら壁直下に上巾0.3m程度の深まりが見られることからすると、それが存在していた可能性はきわめて高い。なおそれらの中に壁の構築法をうかがわせる何らかの特異現象も観察できなかった。



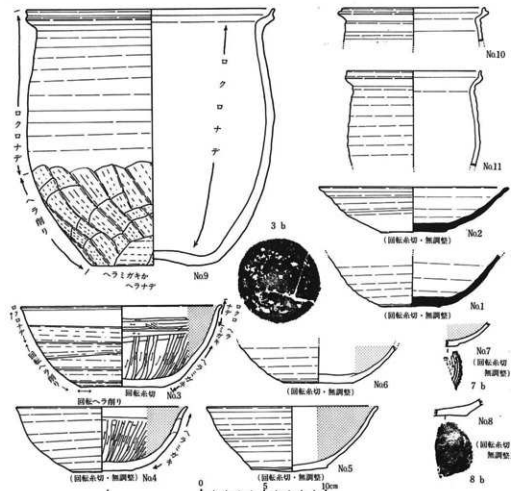
第162図
C165住居跡
実測図

C 165住居跡土質

- ① 黒褐色土、軟質でやや粘性あり
 - ② # Aに面層土の粒子が混じる。部分的に炭化物・焼土が混じる
 - ③ 暗褐色土、軟質で粘性やや強い、面層土の粒子を混じる
 - ④ 褐色土、Cに似るも焼土・炭化物粒を含む
- 焚口地覆土
- ① 赤褐色、焼土、軟質、炭化物なし
 - ② 黒褐色土、焼土粒、シルト粒、炭化物粒を混する。しまりあり
 - ③ 褐色土、焼土混入、炭化物も若干あり、軟質
 - ④ 黒色土、2-3mmの焼土ブロック・シルトブロックを混じる。軟質
 - ⑤ ④に似るが、より軟質
 - ⑥ 暗黄褐色、シルト質土、しまりあり
 - ⑦ # シルト質土に焼土、炭化物混じる

煙道・煙出し覆土

- ① 黄褐色土、シルト質、極めて軟質、カマド構築土か
- ② 焼土
- ③ 黒褐色土、軟質で粘性やや強、シルト粒子混入
- ④ 黒色土、炭化物混じ軟質
- ⑤ 黒褐色、②に焼土、シルト質ブロックが混入



第163図 C165住居跡出土土器実測図・拓影図

土器番号	形状	土質	色	内面	外面	底面	口縁	その他
1	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
2	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
3	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
4	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
5	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
6	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
7	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
8	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
9	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
10	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
11	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部
12	丸型	黒褐色土	黒	滑らか	滑らか	滑らか	滑らか	口縁部

貯蔵様のものはカマド右（東）に隣接してうがたれ、本住居跡の東北コーナーをしめる。長径0.8m×短径0.5m×深さ0.5m程度の南北に長い楕円形乃至長方形をなす。土師器杯破片が覆土中より検出されている。カマド袖構築土の一部がその上位にかぶさることからすると、その掘削は、カマド構築以前ということになる。

既述の床面上の炭化材は、カマド面～西南方に集中し、その方向性は大略カマド方向を求めるものが多い。この量は本遺構を焼失家屋と見做しうるほど多くはない。後述の焼土とともにカマド関連のものと考えておく。

焼土はカマド焚口から連続して南と、若干離れた西南部に見られる。カマド燃焼部からのかき出し他に関連するものと考えておく。

〔年代決定の資料〕カマド燃焼部中・貯蔵穴中・床面出土の土師器・須恵器類である。

〔遺物〕本住居跡からは、古代の土器と縄文時代の土器の二種が出土しているが、遺構と本来的・本質共伴関係にあるのは前者であり、以下にその説明を行なう。なお縄文土器の存在は、縄文時代中期の「遺跡」であった本地点に古代において遺構が営まれたことに由来するものであろう。

古代の土器は二器種（甕型と杯型）のみである。器種の組みあわせについてはやや疑問がある。酸化焰焼成、還元焰焼成とそれぞれ思われるものからなる。器種別に説明する。

(a) 甕型土器 完全土器1、実測可能破片2の計3例を得たが、前者は中型品、後者は小型品である。いずれも所謂長胴型まではいかない若干短胴型のものである。器型・技法ともに共通点が多いので、完全品たるNa9を選択し説明する。肩部から外反した口縁が端部近くで直口となり、その側面に凹部をもつ。ロクロ成形の甕型に通用の形態を示す。外面体部上半にロクロナデ成形痕(かなり凹凸に富む)、下半に縦方向の雄大なへら削り痕をそれぞれ残す。なお体下端の一部においては横方向のケズリも行なわれているらしい。底面は中央部に凹みが形成され、表面はへらナデかへらミガキされる。胎土は小石・粗砂等を多く混じ極めて粗であるが、焼成は普通からやや良の若干硬質である。ただし、二次的火力のためか、部分的には脆くなっている。

(b) 杯型土器 推定される焼成焰の相違により二大別できる。

(b-1) 還元焰焼成と思われるもので、所謂須恵器の杯である。実測可能破片2他を得た。Na1・2ともに内湾気味の体部と外反気味の口縁をもつものであろう。Na2は焼成時のひずみが大きく正確な器形を知ることは出来ないが、Na1よりは器高の低いものになることだけは確実である。かなり浅い印象を与えるものである。内外面ともにロクロナデ成形痕のみが見られる。底部切離技法他は「回転糸切・無調整」である。胎土に若干量の小石を混ざるも、大略精良に近く、また焼成は良好で硬い。

口縁端部が暗色化している例は「重ね焼き」の痕跡かとも思われる。

両資料ともに墨書の痕跡を観察できるが、破片の為詳細不明である。

(b-2) 酸化焰焼成と思われるもので、器内面にヘラミガキ・黒色処理の施こされるものである。所謂土師器の杯である。完全土器（に近いものも含む）3と、実測可能破片4を得た。大型品（Na3）と中型品（Na4、5、6）の二種がある。器形は、内湾気味の体部と外反する口縁部からなる。各部位毎の比率には種々あるらしい。

Na3は既述のように若干大型のものである。外面においては、口縁部にロクロナデ成形痕、体部に回転ヘラ削り痕を残す。体部上半から削られており、かなり広範囲といいうる。底部は回転糸切り後にその周縁部のみを回転ヘラ削りしている。内面においては、口縁部ヘラミガキ後(?)ロクロナデ、体部上半横・斜位ヘラミガキ、下半～底部は放射状ヘラミガキされる。黒色処理はかなりの部分でとんでおり、素地が露出している。しかし面に光沢はある。

その他のものには、体部・底面への調整は見られず「回転糸切・無調整」のものである。

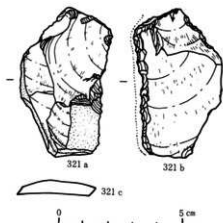
全般的に胎土は精良に近く、焼成もほぼ良好に近い。雲母片をもつ1例（Na5）を観察できたし、また、底部外面中央が若干盛り上がる例（同）も観察できた。

(b-3) 酸化焰焼成と思われるもので、ロクロナデ成形以外の器内面への調整痕をもたないもの。「須恵系土器・土師質土器・赤焼土器・B類土器」などと呼称されているものの一部に該当するものと思われる。北隅コーナーの貯蔵穴と思われる部分出土の小破片その他数点を得た。したがって本来的な共伴遺物か否かについては若干疑問がある。器形をうかがうに足る資料は得られていない。少なくとも口縁は外反するものらしい。

底部切離し技法他は、「回転糸切・無調整」である。

本遺構出土の古代の土器は大略以上のとおりである。この種出器の類別は近年その数を増しつつあるが、従来年代観を援用すると大略9世紀代の半頃を上限とする若干巾のある期間を本遺構の年代と考えても大過なからう。

遺物としてはこの他に石器10類（片刃の不定形掻器）2が床面上・埋土中から出土しているが、既述の縄文土器片と同様に、この堅穴住居跡とは本来的な対応関係をもたない混入品であろう。混入が生じる背景についても既に述べた。



第164図 C f65住居跡出土石器実測図

図番号	種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm	
					たて	よこ
	片刃の不定形掻器	321		床面	5.75	3.3
	"	322	Q 2	埋土	6.75	5.05

計測値 cm・g		材 質	分類	備 考
あつき	重さ			
0.9	17.65	凝灰質珪質花岩	10類	
1.4	55.15	"	"	

D e 50住居跡（第165～167図・図版17）（遺構の確認）調査地のほぼ中央、若干南寄りのⅢ層上面に検出した。既述沢状の埋没谷への傾斜の比較的高位の部分にあたる。

〔重複・増改築の事実〕D f 03住居跡の北東部に重複する。ただし前者は縄文時代中期のものと思われ、その間の時間差なきわめて大きい。増改築の事実は観察できず、単期のものと思われる。

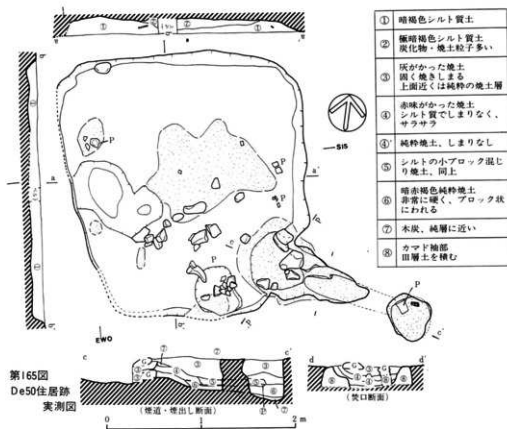
〔平面形・方向〕既述のB f 03住居跡との重複部たる西壁～西南コーナーは、調査の不備から明確にはなしえないのは遺憾である。その他の壁の状況からすると、東西2.6m×南北2.9m×深さ0.1～0.2m程度の、わずかに南北に長い長方形になると思われる。長軸方向は磁北よりわずかに西にふれる。

〔堆積土〕残存する壁高が極めて低いので、暗褐色のシルト質土が一様に見られたのみである。他には後述の焼土ブロックから床面上にのる程度である。

〔床面〕西壁中央部に浅い凹みが存する他は大略平坦である。

〔柱穴〕その可能性のあるものは、床面上・壁外周部のいずれにも検出されない。

〔カマド他〕カマドは東南のコーナーに築かれている。袖部は壁削り出しではなく、壁構築後に改めて築かれている。燃焼部底面の東南端部と東・南壁のそれぞれ延長部がほぼ一致するからである。燃焼部は若干の凹部をなす。



第165図
De50住居跡
実測図

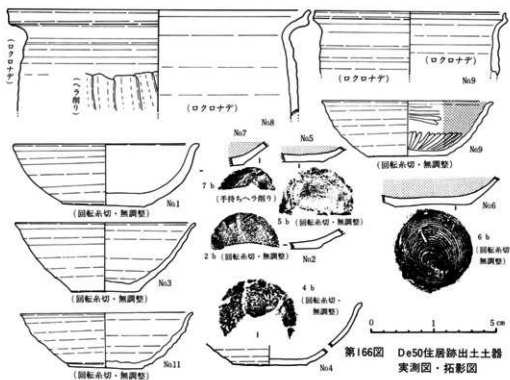
煙道は燃焼部東南端部の高まりの後に続く、比較的急激な斜面である。煙出しはその端部に位置し、最深部は0.45m程度となる。この両者の連続はトンネル状であり、所謂くり抜き式の姿を良好に残している。両者ともにその底面は硬く焼けており、また炭化材も見られる。なおカマド袖から一部本体には礫が用いられている。

〔その他の施設〕周溝と思われるものは観察できなかった。貯蔵穴様のはカマド石（西南方）にはば隣接してうがたれており、長径0.6m×短径0.5m×深さ0.3m程度の楕円形をなす。その上面～覆土中に礫・土器類を検出した。

他に床面上に焼土ブロックが3ヶ所存在する。カマド焚口西北方の床面ほぼ中央部とその西北方、さらに貯蔵穴附近である。これも、カマドからのかき出しなどに由来するものと思われ、家屋の焼失その他を示すものではないと考える。また性格不明であるが、若干量の礫も散在する。

〔年代決定の資料〕煙出し中・貯蔵穴様ビット・床面焼土上出土他の土師器類他である。

〔遺物〕



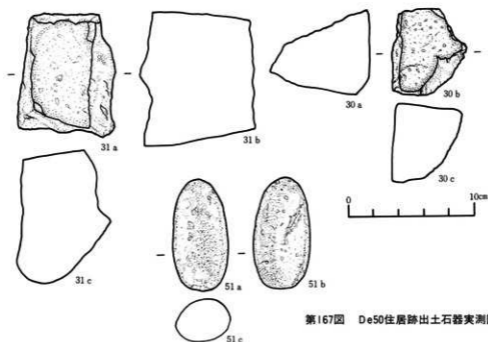
No.	出土層位	器種	形状	構成	土質	色調	表面	底面	体下層	旋回切痕	調整	寸法	その他		
1	Q4・埋	鉢	定	普通	13Y R7/2	粗砂	5Y R7/2	ロクロナデ	13Y R7/2	ロクロナデ	-	18.8	6.6	4.9	酸化磁
2	"	"	底	普通	5Y R7/2	石稜石, 粗砂	5Y R7/2	"	5Y R7/2	"	"	-	(5.0)	"	"
3	Q2・埋	"	"	"	"	"	5Y R7/2	"	"	"	"	(14.4)	(5.4)	(5.5)	"
4	"	"	"	平底	13Y R7/2	粗砂	10Y R7/2	"	13Y R7/2	清灰層	"	"	-	(6.0)	"
5	埋	出	底	普通	13Y R7/2	粗砂	黒	旋回糸切・平底 黄色焼痕	10Y R7/2	清灰層	"	"	-	(6.0)	"
6	埋	"	"	高脚・破底	13Y R7/2	"	"	"	13Y R7/2	清灰層	"	"	-	(6.0)	"
7	"	"	"	"	10Y R7/2	粗砂	"	"	10Y R7/2	清灰層	"	"	-	(4.5)	"
8	"	鉢	口縁	普通	13Y R7/2	小石	13Y R7/2	ロクロナデ	13Y R7/2	ロクロナデ	手向へラ へラ削り	(14.2)	"	"	"
9	"	"	"	"	10Y R7/2	粗砂	10Y R7/2	"	10Y R7/2	清灰層	"	"	-	(15.2)	"
10	埋	鉢	定	普通	13Y R7/2	粗砂	黒	旋回糸切・平底 黄色焼痕	13Y R7/2	清灰層	"	(13.7)	5.3	4.5	"
11	"	"	"	普通	13Y R7/2	粗砂	13Y R7/2	ロクロナデ	13Y R7/2	"	"	(13.4)	6.0	4.5	"

本住居跡出土の土器類にも、古代に属するものと縄文時代のものの二種があるが、遺構と本質的の伴関係を示すものは前者であり、以下にその説明を行なう。

古代の土器は二器種（変形と杯形）のみであり、いずれも酸化焙焼成と思われるものである。

(a) 変形土器 実測可能な破片資料2個体分を得た。大・小二種の大きさからなる。器形・技法ともに共通点が多い。即ち、肩部から外反する口縁部が、端部近くで直口に転ずる屈曲の度合の大きいものである。直上部側面には凹部が形成される。

外面体部上半にはロクロナデ成形痕、下半に縦方向の巾広いへら削り痕が顕著に見られる。



第167図 De50住居跡出土石器実測図

図番号	種別	登録番号	地点	層位	計測値 cm・g			材質	破損	凹部数			その他	
					たて	よこ	あつさ			凹面	片面	凹部数		
	凹み石	51		床面	9.0	4.4	3.3	140.0	複層石安山岩、20類	完		○	○	
	石蓋?	29		"	13.0	9.7	6.0	860	" "					19類
	"	30		"	6.8	5.0	7.0	290	" "					
	"	31		"	17.0	14.0	8.0	1,780	" "					

その他自然石 複層石安山岩3、流紋岩質角礫凝灰岩1

内面には全面にロクロナデ成形痕が見られるのみである。

胎土は小石、粗砂を混じ粗であり、焼成はやや良いが軟質である (Na 8、9)。

(b) 杯型土器 いずれも内湾気味の体部と外反する口縁部を有するが、器面調整に二種ある。

(b-2) 器内面にヘラミガキと黒色処理を施す。底面のミガキは所謂放射状に近い。底部切離し技法の判明した3例のうち、2例は「回転糸切・無調整」、1例は「(切離し技法不明)・手持ちヘラ削り」である。後者の体部下端 (あるいは体下半) にも「手持ちヘラ削り」調整が見られる。胎土は概ね精良で、焼成良好で硬質のものが多い。黒色処理部分には光沢も残存する。

(b-3) 器内面にロクロナデ以外の特別な仕上調整が見られず、また技法も「回転糸切・無調整」のもののみのものである。(i)に比し胎土は極端に粗 (小石・石英粗粒等多い) であり、焼成もやや軟質である。色調は橙色系一色であり、特徴的である。

器厚のやや厚手で、全体の器形の丸味のあるものと薄手のものの二種がある。これらの意味は未詳である。

この土種の器は「B類土器・赤焼け土器・土師質土器・須恵系土器」などと呼称されているものの一部に該当しようが、特定は避けておく。

以上が本住居跡出土の土器の概要である。土器の組みあわせの中に還元焰焼成の土器（所謂須恵器）を欠く点が注意される。通常集落跡出土の資料には、遺物残存状況という要素も考慮する必要があるが、一応指摘しておく。（b-3）のごとき土器の「集落跡」出土資料としては、北上市尻引遺跡、などが比較的古い段階のものとして知られている。尻引においては9世紀半頃という年代が与えられている。また（b-2）に調整痕を有する例は、北上市相去遺跡群においては、10世紀代にまでその存在が知られている。

これらの他に石器19類（石皿）3、20類（凹み石）1を、ともに床面から検出した。これらは既に述べた理由で、この住居跡と本来的な対応関係をもたない可能性が大である。ただし前者については、古代においても用いられた（縄文時代石器の再利用をも含めて）可能は皆無ではないであろう。

(B) 要約 (1) 遺構 2棟のみであり、かつ不明な事項も多いので詳述は避ける。いずれも小型な点、柱穴配置が不明な点、カマド構築部が北壁・東壁であり、その中央部ではなくいずれかに偏する点などの特徴は、本県における平安時代堅穴住居跡の特徴に合致するところである。

本県における古代の堅穴住居跡の構造の一部の特徴は次のようになる。この場合は官衙などと思われる遺跡例は除外し、通常集落と思われるものを採用した(第168図)。

第Ⅰ～Ⅳ群期、古墳時代に相当するものであるが、Ⅰ・Ⅱ群期にはカマドが付設されない。四隅の角張った均正な正方形プランと、対角線上にのり、やや中央による4本の主柱穴をもつ。貯蔵穴様ものは既にある。規模に異同のあるものが組みあわせになる。Ⅲ群期にはカマドが付設されはじめるが、その状況にはばらつきがあり、斉一性はない。長大な煙道は未確認である。第Ⅳ群期にはカマド本体・長い煙道部をともに備えたものが出現し始める。

以上の時期の堅穴軸方位は変化に富み、一定の傾向性は示さない。なおⅢ群期の西大畑例には主柱穴以外に西辺中央の壁直下に柱穴様の2ヶのピットもある。

第Ⅴ・Ⅵ群期、四隅に軽い丸味をもつほぼ正方形なプランと、先と同様に対角線上にのりが如くに配置された4本（稀な大規模例では6本以上）の主柱穴、北壁に付設されたカマドなどを有する構造をもつ。斉一性はかなり強く、構築法の確立を示すかのようである。ただし長大な煙道の有無にはばらつきがある。明白なそれをもたない若干例も混在する事実がある。カマド焚口部には礫を門状に配置する。そのより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺（多くは南壁）中央壁直下に柱穴様のものを

もつ例がある。建物主軸方位は³磁北にほぼ一致→やや西に偏す。という変遷をたどるらしい。曾辺8m～6m程度の大規模なものと、5m以下の中小規模のものがセットになる。

VII群期 プラン・支柱穴配置などは前代に共通するが、建物主軸方向はさらに西に偏し、かつカマド袖部への土師器類（長胴甕型を主とするが、各種の器種がある）の芯としての埋置が見られはじめる。支柱穴は4本を中心とするが、6本のものもあり・さらにその存在が不明確なものも増加する。前代に比し不均整なプランをもつものが増加する。

VIII群期以降 集落跡と思われる遺跡の例のみをとる。変化の度合いがきわめて大きい。

(1) 柱穴配置 支柱は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本が壁直下に寄るものも増加する。さらに柱穴配置の判然としない例がさらに増加する。

(2) 側壁 板材を用い、²腰板乃至壁風のものをつくり出す例も増加する。その四隅には支柱様のものが伴う。

(3) カマド構築部位 北壁も継続するが、東壁・南壁などへ変化する例が圧倒的に多くなり、かつ壁中央ではなく若干いずれかに偏した位置となる。江釣子村猫谷地においては南壁→東壁という変遷を示す。

カマド構築法は、本体にも板状礎を用いるもの、煙道部に甕を横転位に据えるものなども加わる。所謂くり抜き式のものが多い。

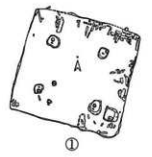
(4) (堅穴住居跡以外に) 掘立柱建物・井戸・大溝も集落の構成要素に加わる例もあらわれる。

X～XI群期 長方形プランで、側壁直下に多くの柱穴をもつ例が増加する。カマドなど特別な施設はほとんど見られない。これらの中には中世に入るものも含まれる可能性がある。

第VIII群期以降については、遺跡の性格別の遺構の把握（構造・組みあわせ）が必要である。それは掘立柱建物についても同様である。

(註) 群名は第169図のそれに対応している。

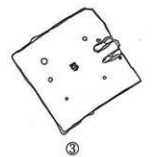
古墳時代(I~IV群)



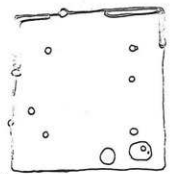
I 群期



II 群期



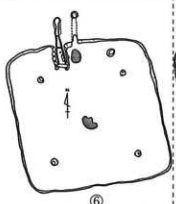
III 群期



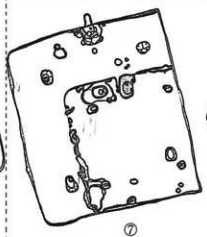
IV 群期

① ③ ⑤は約180分の1
④は約150分の1
⑦は約100分の1

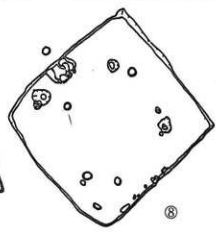
奈良時代・初期(V~VI群)



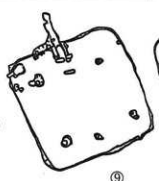
V 群期



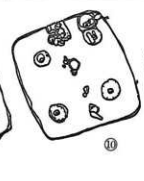
⑦



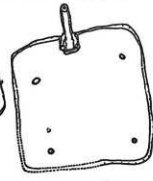
⑧



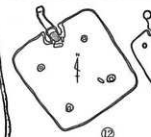
VI 群期



⑩



⑪



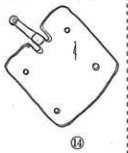
⑫



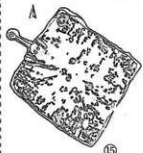
⑬

⑥ ⑫ ⑬は約180分の1
⑦-⑩は約150分の1

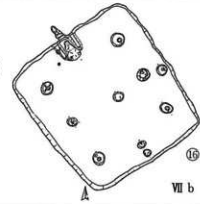
奈良時代(VII a・VII b群)



VII a 群期



⑮



VII b 群期

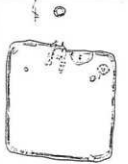


⑰

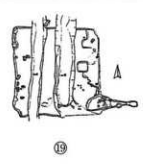
⑭-⑰は約180分の1

※ 提示遺構の少なさと、実在する遺構数とは関係ない。

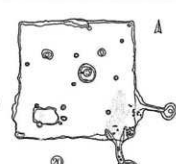
平安時代(VIII群)



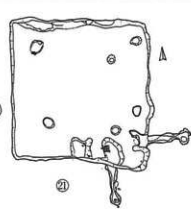
⑱



⑲



⑳



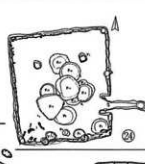
㉑



㉒



㉓



㉔

⑱-㉑ 約180分の1
㉒-㉓ 約150分の1
㉔ 約180分の1

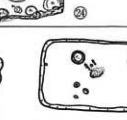
平安時代末(XI群)



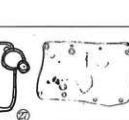
㉕



㉖



㉗



㉘

第168図 岩手県における古代住居跡集成

註① 高山遺跡 TK02住	高山遺跡	若手県水沢市文化財報告書 第1集	高山遺跡調査委員会・水沢市教育委員会	昭和53年3月
② 笹谷地 * CH74住	笹谷地遺跡	CH74住居跡	若手県教育委員会調査	
③ 面麻 * S102住	面麻遺跡	現地説明会資料	水沢市教育委員会	昭和55年6月
④ 西大畑 * C f 53住	西大畑遺跡	若手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一第ー	若手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑤ 勝性 * G-15住	勝性遺跡	現地説明会資料 (財)若手県埋蔵文化財センター		昭和54・55年 なお、勝性遺跡については、高橋与右衛門氏より各種指示をうけた。深謝する。
⑥ * J-7住				
⑦ * F-11住				
⑧ * C-2-2住				
⑨ * G-8-1住				
⑩ * H-2住				
⑪ 玉貫 * I-12-1住	玉貫遺跡	現地説明会資料 (財)若手県埋蔵文化財センター		昭和年
⑫ * C-11住				
⑬ 今泉 * B R 62住	今泉遺跡	若手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一第ー	若手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑭ * B d 59住				
⑮ * B d 03住				
⑯ * B i 24住				
⑰ 今泉遺跡 C b 24住				
⑱ 石田 * D f 59住	石田遺跡	若手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一第ー	若手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
⑲ * D d 03住				
⑳ * D f 09住				
㉑ * C d 21住				
㉒ * C f 56住				
㉓ * D a 56住				
㉔ 尻引 * 第6号住	尻引遺跡	尻引遺跡調査報告書 文化財調査報告書第17集	北上市教育委員会	昭和52年3月
㉕ 上平沢新田 * A h 15	上平沢新田遺跡	若手県文化財調査報告書第52集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一第ー	若手県教育委員会・日本道路公団	昭和55年3月
㉖ 鳥ノ海 A * 第2号(A J 56)	鳥ノ海 A 遺跡	若手県文化財調査報告書第52集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書一第ー	若手県教育委員会・日本道路公団	昭和56年3月
㉗ * 第3号(A R 53)				
㉘ * 第4号(A f 03)				

(2) 遺物 本遺跡出土遺物の編年上の位置について少しくふれる。本県における古代の土器群の変遷については、大略第169図の如きものが考えられる。未発表資料をも多く用いたこの表はあくまでも試案であり、かつ私案であることを強調しておく。各資料の本報告が公にされた時点で詳細に検討されるべきものであることは当然である。このうち平安時代以降に該当すると思われる第Ⅷ群土器以下について、若干くわしくふれておく。

第Ⅷ群土器 本群にはロクロ使用土師器が相伴し始める。土師器は甕・杯ともにロクロ使用と不使用のものが混在するが、そのあり方は遺跡により異同がある。まずロクロ不使用杯がやや多く、甕はすべてロクロ不使用の長胴・球胴型からなる例がある。杯を見ると無段・平底のロクロ不使用・削り調整をもつロクロ使用土師器(回転系切り)、ヘラ切り・無調整を主とする須恵器杯などとなる。他例は、ロクロ不使用杯は皆無か、存在しても稀で、甕にはロクロ使用のものも加わる例であり、詳しくみると、削り調整のあるものを主とし、若干量の無調整のもの

のを伴うロクロ使用土師器杯と、ヘラ切り・無調整を主とし、若干量の削り調整（回転・手持ち）をもつもの及び、糸切り・無調整の須恵器杯、ロクロ不使用甕、体部上半に叩き目とロクロ成形痕・下半に削り調整痕をもつ土師器甕、須恵器広口壺、同長頸壺、同蓋などからなるものである。以上の両者からはともに高杯・甕は消えており、逆に若干軟質の酸化焙焼成と思われる土器が加わる。平安時代初頭～前半頃と思われるものである。この時期は本県にも律令政府の具体的・直接的支配が及んでいる時期であり、遺跡の性格に十分留意して遺物を見る必要があろう。

第IX群土器 本群にはロクロ不使用土器は原則的には伴わない。土師器杯は回転糸切り・無調整と、調整あるもの（回転・手持ち）の両者からなる。土師器長胴甕胴部の叩き目は概ね消える。他に中型甕・埴などがある。須恵器には杯（回転糸切り・無調整のみ）・甕・蓋がある。技法の全般に省略化傾向が目立つ。この群にも酸化焙焼成の土器が共伴する。これについては既に見解の発表がある(註13)。以上は平安時代後半の10世紀代のものであろう。緑釉陶器共伴例もある。

第X群土器以降については不明の点が多く、詳述は省略し、見通しのみを示す。第X群は所謂須恵系土器を主体的にもつグループであり、杯・台付杯・皿・台付皿・黒色処理の杯、長胴甕、小形甕、埴、耳皿などのセットとなる。緑釉陶器も共伴する。平安時代後期とりわけ11世紀代のものであろう。

第XI群としては詳細未詳であるが、灯明皿的な部厚・粗雑な軟質土器を有するものが該当すると思われる。杯・台付杯・皿・甕などからなる。平安時代末期の12世紀以降にならう。経筒と思われる装束文ある灰釉陶器（常滑焼）を共伴する例もある。

大略以上が平安時代土器群の変遷の概略である（勿論第IX群の下限は現状では不明であり、一部中世に位置するものも内包する可能性もある。その吟味は今後の課題である）。これらと比較した場合、本遺跡出土の土器群は（器種の全容不明であり疑問も残るが、あえて同定を試ると）、平安時代末期のものでは少なくともないことは明らかである。初頭のものとするにはヘラ切り技法の未確認という事実が否定的な立場をとらせる。したがって10世紀代と思われる第IX群土器に近いとするのが妥当であらう。ただし、体部下半の広範囲に回転ヘラ削り調整を施こした杯型土器の大ぶり・深めの器形は、9世紀初頭に多く見られるものに極似する。したがってより第VIII群に近い第IX群土器とみなしてもよいのかもしれない。

石鳥谷地方の平安時代の歴史については不明な点が多い。北上川河東については9世紀代とされる大曲、10世紀代とされる大明神の二遺跡の存在からある程度のことは判明しているが、河西については資料がほとんど未検出である。しかし、9世紀代の前半には、石鳥谷以北にも律令政府の直接的力が及んでいたことは明らかである。それは須恵器窯跡・城柵官衙遺跡の確

認により明白な事実となっておる。したがって本地域にも近い将来に平安時代前半の生活・政治の痕跡が検出される可能性が大である。再述になるが、須恵器の窯跡は、律令制下の郡内に最低一個所設置された可能性もあり、その検出が文献上の郡の存在の有無の検証材料となしうものといえるのである。弘仁二年正月条の和我・菟縫・斯波の三郡のうち、前・後者についてはその中樞域のある程度の推定が可能になりつつあるが、菟縫郡については資料がもっとも少ない。既検出の須恵器窯跡は残丘・段丘崖の斜面を利用しており、類似地形分布域は注意されてよい。

最後に平安時代以前の土器群の変遷について簡単にふれておく。型式にまで高められていないものを含む。

古墳時代 この時代に属すると思われるものはⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群であるが、最近その存在が確認され始めたものであり、その組成内容は不面な点が多い。その中では西大畑例は貴重である。東北南半における塩釜式・南小泉Ⅱ式(引田式?)に相当しよう。

古墳時代末～奈良時代初期 Ⅴ・Ⅵ群であり、南半の住台式、栗閉式に類似する。そのより良好な類例は膳性遺跡にある。杯への黒色処理はⅤ群期より始まる。また杯(含高杯杯部)体部外面へのヘラミガキ調整もⅣ群期より存在する。Ⅲ群に発した朱塗処理も一部(高杯へ)残存する。

奈良時代 Ⅶ群である。前半に位置すると思われるⅦa群は、杯の小型化・平底化の傾向が開始するものの、須恵器が容器として日常生活に組み込まれていない(セット化していない)段階のものである。図には示していないが球胴の甕型(乃至壺型)も存在する。長胴甕肩部の段の目立たないもの、底径のより大きなものも増加する。前代よりの甕(多孔式・無底式)は存在するが、比率はあまり高くない。球胴の甕(乃至壺)への赤色線描はこの段階から開始していた可能性がある。玉貫遺跡の大半が該当しよう。

後半のⅦb群は、杯の小型化・無段平底化の傾向がより顕著になり、甕の存在もより稀薄になり、高杯の存在もより稀薄になる。既述の赤色線描はこの段階に盛行するし、盃状の手づくね土器もこの段階に集中する。そして須恵器のセット化が達成される(これ以前においては、Ⅴ群期から伴出しているが、それは甕・高杯などの「特殊」な器種であった)。セット化された須恵器の器種には甕型・高台付杯などの変化がある。

大略以上である。評述は別に機会を設けて行なう。今後は各群を型式にまで高める努力が必要である。また奈良時代末～平安時代初期の土器群の様相は、遺跡の性格によって複雑に変化しており、当該遺跡の性格別の検討をまず実施し、その後に比較を行なうべきであろう。また「須恵系土器、土師質土器、赤焼土器、B類土器。などと呼称されているものについては、そのそれぞれの実質の確定と、時間的変遷の確定がまず必要とされ、その後に整理・統合されるべきものであろう。

註 本編年試案の作成にあたっては多くの先学の業績に負うところが大きい。先学の学恩に感謝する。また考古学研究会岩手支部の例会における討論内容にも負うところが大きい。沼山源喜治氏をはじめとする会員諸氏に深謝する。以下に編年表に用いた資料の典拠を掲げる。

I群 ①高山遺跡 T K02住 高山遺跡岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査会・水沢市教育委員会 昭和53年3月

②西大畑遺跡・溝、西大畑遺跡岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅺ—岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月

II群 ③楢谷地遺跡 和賀郡江釣子村楢谷地遺跡岩手県教育委員会 昭和49年3月 実測は佐久間豊氏による。

III群 ④西大畑遺跡 C f 53住居跡 註②に同じ

⑤面塚遺跡 S 102住 現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年6月

IV群 ⑥膳性遺跡 G—15住居跡 膳性については(財)岩手県埋蔵文化センター高橋号右衛門氏から種々の教示・実測図の提供をうけた。深謝する。

V群 ⑦ 〃 E—06住居跡

VI群 ⑧今泉遺跡 B g 62住地 註②に同じ

VII a群 ⑨ 石田遺跡 D i 30住居跡 同第61集

⑩水沢市玉貫遺跡の古代の資料のすべて (財)岩手県埋蔵文化センター資料実見による 山口了紀・吉田洋氏の教示をうけた。

VII b群 ⑪石田遺跡 D d 03住居跡 註⑨に同じ

VIII群① 〃 D a 56 〃 同上

⑫林前遺跡 S F 22住地 林前遺跡、岩手県水沢市文化財調査報告書第3集 水沢市教育委員会 昭和54年3月
IX 相去遺跡1期 相去遺跡については岩手県立博物館高橋信雄氏より種々教示と実測図の提供をうけた。なお氏は相去のみならず各群の全般にわたり意見交換を行ない益する所大であった。深謝する。さらに以下の論文がある。

X 〃 II期

⑬高橋信雄 岩手県のロクロ使用土師器について 考古風土記 第2号 昭和52年4月

なお ⑬に対する批判的見解として

⑭本堂寿一 極楽寺伝塚主坊跡緊急発掘調査報告書—付寺跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第3号 昭和55年8月があるがここでは前者にしたがっておく。今後の検討課題とする。

XI群以下については金ヶ崎町西根・島ノ海の個別報告中に詳細がのべられている。また執筆者の八重樫良宏氏から種々教示をうけた。

⑮西根遺跡 } 岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書—Ⅺ—

⑯島海A・B・C遺跡 } 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月

本試案作成にあたっては、以下の諸先学の業績が不可欠であった。

氏家典 東北土師器の型式分類とその編年 歴史第14輯 1957年

〃 陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題— 柏倉亮吉教授還暦記念論文集 山形県の考古と歴史 山教史学会 1967年9月

工藤雅樹・桑原滋郎 東北地方における古代土器生産の展開 考古学雑誌 第57巻第3号 1972年

岡田茂弘・桑原滋郎 多賀城周辺における古代杯型土器の変遷 研究紀要1 宮城県多賀城跡調査研究所 昭和49年

桑原滋郎 東北地方および北海道の所謂第1型式の土師器について 考古学雑誌第61巻第4号 1976年

草間俊一 先史期 盛岡市史 盛岡市役所 1958年

江上波夫・関野雄・桜井清彦 東北地方における集落址の研究 館址 東京大学出版会 1958年

志間泰治・小井川和夫・加藤道男 (1)膳塚遺跡

3 時代不明の遺構

Cg71溝状遺構(第170図) Cf65住居跡東方に検出した。上端0.45m×下端0.35m×深さ0.1m程度の規模である。出土遺物は縄文土器破片、ロクロ使用の土師器(杯と思われる)の細



内面 色調 7.5Y R 6/ 浅黄橙
調整 入念なミガキ、底面にクラック
外面 色調 7.5Y R 6/ 灰褐
施文 然糸文(原体右捻り)
体下端ミガキかケズリ
焼成 良 好
胎土 色調 7.5Y R 6/ 褐灰
土性 粗砂ありて粗
分類 II a ㊦? (あるいは I b ㊦)

第170図 Cg71溝状遺構出土土器拓影図

片が少量見られた程度である。ここでは縄文土器破片を示す。

Ch62遺構・Ci62溝状遺構(第171図、図版18) (遺構の確認) 両者を一括する。調査地のほぼ中央部で、やや東寄りのIII層上面に検出した。調査地内の比較的高位部であるが、IV層のレベルが高く、かつIII層も粗砂に近くなる部分である。礫が露出する。

[重複他] Ci62遺構がCh62遺構に重複し、前者が新規である。その他の現象はない。

[平面形・方向] Ch62遺構はほぼ長方形に近く、長辺4.7m×短辺4m×深さ0.3m程度の規模となる。東辺が若干長く4.2mになる。長辺の方向は大略東西方向に一致する。

Ci62溝状は長楕円形乃至長方形を呈し、長辺3.5m×短辺0.7m×深さ0.4m程度の規模である。方向は同様に大略東西方向に一致する。

[堆積土] 黒色土と黄色土が互層状態で堆積しかつCh62の覆土上半には礫が多数混在し、意図的な投入と思われる。うめ戻しであろう。

[床面] ほぼ平坦である。Ci62には底面に性格不明の掘り込みがある。

[ピット類他] Ch62の床面に2、Ci62に2の掘り込みがあるが、性格不明である。

[その他の施設] カマド他は検出できない。

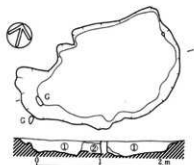
[年代決定の資料] Ch62床面検出の陶・磁器類、鉄器類である。Ci62は不明であるが石器がある。

[遺物] (1) 土製品 床面上からII a ㊦類の縄文土器片1、礫間より施軸陶器・磁器碗(染付)の各破片を得た。後者は近代以降のものである。

(2) 鉄製品、礫間より釘と思われる破片を得た。所謂丸釘である。

(3) Ci62溝状遺構から石器10類(片刃の不定形挿器)1を得た。

その他の特記事項はない。明確な共存遺物もなく、年代・性格ともに不明である。なお既述の覆土の特徴は、比較的最近のものと思われるそれである。



- ① 暗褐色シルト質土、粘性あるもしまりなし
- ② 黄褐色粘土質シルト、皿の動いたもの

第173図 Cj56遺構実測図

Cj50遺構（第174・175図、図版18）〔遺構の確認〕調査地はほぼ中央のⅢ層上面である。Ⅲ層上に礫が見られ始める部分で、大略平坦である。

〔重複・増改築の事実〕いずれも確認できず、単独・単期のものと思われる。

〔平面形・方向〕若干不整ではあるが、長径3.6m×短径3.1m×深さ0.35mの規模の長方形に近い。長軸方向は磁北からわずかに東にふれ、NE～SW方向にのびる。壁の立ち上がりは緩い傾斜をもってする。

〔堆積土〕しまりのない褐色系統の土、黄褐色粘土質シルトブロックが見られ、人為的な埋め戻しの跡をうかがわせる堆積状況を示す。床面上に黒色土の薄層が見られ、一定期間・床面が露出していたことを示す。如上の堆積は、比較的最近のものを示すものである。

〔床面〕後述のピットの一部が見られるだけで、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりについては既にふれた。

〔柱穴〕ピット類は壁外・壁上・壁直下であり、床面中央にはない。これが特徴とも思われるが、断言できない。

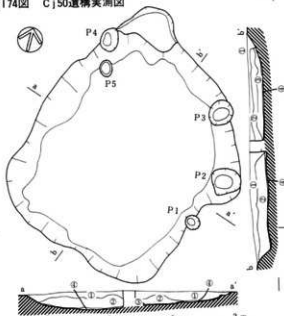
〔遺物〕埋土中より縄文土器細片を若干量得たのみである。それらはⅠ類のいずれかと思われるもの（4）、Ⅲ類のそれ（1）、Ⅴ類のそれ（2）、Ⅲ～Ⅶのいずれかと思われる隆・沈線による渦文を有するものの組みあわせからなる。遺物自体としては縄文時代のものであろうがそれが本遺構の年代を示す可能性は少ないことについては既にふれたとおりである。

〔2〕石器類 埋土中から10類（片刃の不定形搔器）1を得たが、その取り扱いは上と同様に行なうべきであろう。

第174図 Cj50遺構実測図

①	調査地中心より北東、約1.5km×2
②	調査地中心より北東、約1.5km×2
③	調査地中心より北東、約1.5km×2
④	調査地中心より北東、約1.5km×2

試料No.	土層	方位	深さ(cm)	備考
1	0.20×0.20	0.13×0.11	0.13	粘土質土
2	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
3	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
4	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
5	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土



図番	種別	登録番号	地点	層位	計測値(m・ε)	材質	分析番号
174	片方の不安定形埴輪	56	Q4	埴土	5.2 2.1 0.8	凝灰質硬質灰石	100



試料No.	土層	方位	深さ(cm)	備考
1	0.20×0.20	0.13×0.11	0.13	粘土質土
2	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
3	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
4	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土
5	0.45×0.45	0.20×0.22	0.14	粘土質土

第175図 Cj50遺構出土土器拓影図



D h 59遺構 (第176・177図、図版18)〔遺構の確認〕調査地中央のやや南寄りのIII層上面である。調査地内での比較的高位部にあたる。西方・南方への傾斜の始点付近である。

〔重複・増改築の事実〕ほぼ同一規模のものが2重重複している。便宜的にはD h 59(新)・(旧)遺構と命名した。以下個別に説明する。

(1) D h 59(新)遺構 (旧)遺構の廃絶・埋没後にその一部をかすめて構築されている。

〔平面形・方向〕長径3.3m×短径2.2m×深さ0.3mの規模をもつ楕円形に近い。長軸方向には磁北にほぼ一致する。壁の立ち上がりは比較的緩やかであり、断面形は金だらい型を呈す。

〔堆積土〕軟質でしまりのない褐色系のシルト質土が主体をなす。固結度の無さは、その時間的位置が比較的最近のものであることを示す。なお(旧)遺構との重複部分にはIII層土を用いての、一種の貼り床的な措置が施される。

その他としてはピット1がある程度で、特記すべき事項はない。覆土中より縄文土器片若干を得たが、遺構との本来的の伴関係はない。年代不明であるが、既述のように、比較的最近のものである可能性が強い。

(2) Dh59(旧)遺構〔平面形・方向〕長径2.9m×短径1.9m×深さ0.65mの規模の南北に長い楕円形を呈す。長軸方向は磁北にはほぼ一致する。

〔堆積土〕ほとんど固結しない軟質の黒土色(表土に由来すると思われる)が主体的に堆積する。その状況は(新)に似て、時間の経過がほとんどないことを示すものである。ほぼ単一の層なる点は、人為的な埋没の反映であろう。

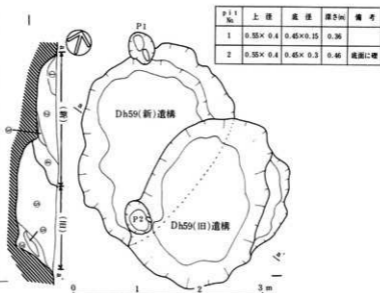
その他にはピット1をもつ程度で特記事項はない。年代等も不明であるが、大略(新)と同様であり、比較的最近のものではあろう。

以上本遺構はその新・旧ともに最近のものと思われるものの、性格等は不明である。

〔遺物〕調査中の不手際で新・旧の区別をしないで遺物を取り上げたので、厳密な対応関係は不明であるが、埋土中から土器類の出土をみた。それらはVb類(1)、VI類(3・4)であり、他に、特定はできないか隆・沈線からなる渦文をもつ体部破片も見られる。しかし、これらが本遺構の年代を示すものではないことは既にふれてある。

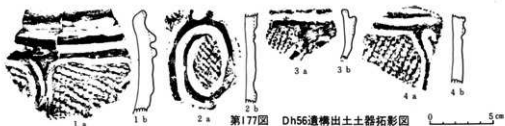
石器は24類(不明磨製品)1と、珪質泥岩の破片1を得たのみである。

①	褐色土、基質はシルト質土、 ②に田層土ブロックの混じりたもの、軟質
②	暗褐色土、粘性、しまりともになし、②に田層土ブロックの混じりたもの、土器細片混入
③	褐色土、基盤の田層土、人為的にしいたもの
④	暗褐色土、粘性なく、しまりはややある、田層土粒子混入、土器細片若干あり
⑤	黒褐色土、軟質、土器若干あり



第176図 Dh59遺構(新・旧)実測図

No.	層位	層名	種類	土質				色				備考	
				色	質	硬	軟	色	質	硬	軟		
1	表土	層	Vb類	暗褐色土	粘	軟	軟	暗褐色	粘	軟	軟	田層土混入	
2	"	"	"	暗褐色土	粘	軟	軟	暗褐色	粘	軟	軟	田層土混入	
3	①	"	"	暗褐色土	粘	軟	軟	暗褐色	粘	軟	軟	田層土混入	
4	②	"	"	暗褐色土	粘	軟	軟	暗褐色	粘	軟	軟	田層土混入	



Dh50遺構・Dh53遺構（第178・179図、図版18） 二つの遺構を一括して記す。

〔遺構の確認〕調査地中央の南寄りのⅢ層上面に検出した。比較的高位の平坦部から沢状の地形と段丘崖への緩斜面への遷移点にあたるが、ほぼ平坦である。

〔重複・増改築の事実〕標記の二遺構が重複するが、前者が新期、後者が古期である。それぞれが小型の掘り込みと重複しているが、詳細は把握しえなかった。遺憾である。以下別個に説明する。

(1) Dh50遺構〔平面形・方向〕現状では不整形であるが、長径4.8m×短径2.5m×深さ0.2m前後の楕円形乃至隅丸長方形をなすと思われる。長軸方向は磁北より東にふれ、NE～SWの方向をとる。壁の立ち上がりは緩やかである。

〔堆積土〕黒～暗褐色系統のシルト質土が基質であるが、それはⅢ層土ブロックが混入している。したがって人為的な埋め戻しをうけた可能性が濃厚である。

〔床面〕ほぼ平坦であり、貼床等は認められない。

その他の施設は認められない。P1～3との関係も不明である。年代推定に足る資料も得られないが、覆土からして、比較的最近のものと思われる。

(2) Dh53遺構〔平面形・方向〕重複があるらしく極めて不整形であるが、本来は直径3.5m×深さ0.3m程度の規模の円形に近かったと思われる。

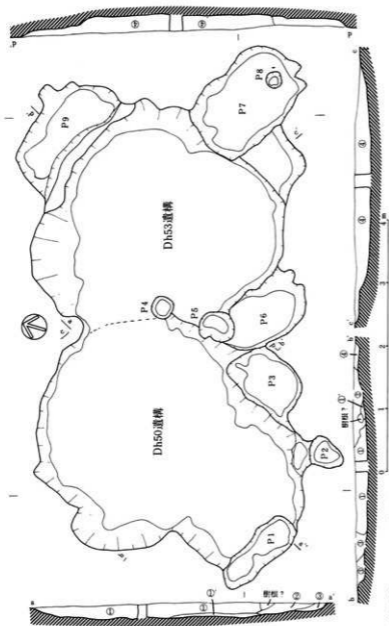
〔堆積土〕暗褐色シルト質土の基質中にⅢ層土ブロックが混入しており、人為的に動かされたものの如くである。

〔床面〕比較的平坦であり、先と同様に貼床等は認められない。

その他の特記事項はない。ピット類との関係も不明である。うちPは現代にうがたれたもの（産後の胎盤処理）という。年代・性格ともに不明だが、比較的最近のものである可能性がある。

〔年代決定の資料〕上記の如く決定に足る資料に欠けるが、埋土の状況などから比較的最近のものと考えておく。

〔遺物〕(1) 土器類 両遺構ともに床面からの遺物出土の事実無く、埋土中のみから少量出土したのみである。Dh50遺構からはI a類？(3)のみ、Dh53遺構からはI a類？



第178図 Dh50・53遺構実測図

①	黒褐色シロ土質土	粘質。しまりわずか、部分的に炭化物混入。
②	*	①⑤⑥の黒褐色粘土層シロ土の混土
③	暗褐色シロ土質土	粘質。しまりともわずかにあり、部分的に田層土アロックスあり
④	*	②に似るも、若干細粒化
⑤	*	③に似るが、しまりのあるもの
⑥	*	粘性。しまりともあり、全般的に田層土アロックス混入

掘り込みNo	上層	幅	長さ	深さ	備	号
1	1.4×0.45	1.25×0.3	0.11			
2	1.2×0.45	1.0×0.3	0.12			
3	1.2×0.45	1.0×0.3	0.07			
4	0.5×0.25	0.25×0.25	0.06		底、現代のものと思われる	
5	0.4×0.45	0.4×0.2	0.07			
6	1.5×0.9	1.4×0.8	0.15			
7	1.8×1.2	1.65×1.0	0.09			
8	0.25×0.25	0.15×0.15	0.42			
9	1.9×0.8	1.6×0.45	0.24			

(1)、I b類 (2) を得た。いずれも細片であり、特定は困難である。

(2) 石器類



第179図
Dh53遺構
Dh50遺構 } 出土石器拓影図
1、2 Dh53遺構
3 Dh50遺構

No.	地点	層位	種類	寸法	土質			土層			出土	備考	
					色	質	状態	色	層	厚			
1	Dh53	遺土	土器(片)	1.5×1	暗褐色	シルト質	粘性	1	1	0.3	1	1	1
2	Dh53	遺土	土器(片)	1.5×1	暗褐色	シルト質	粘性	1	1	0.3	1	1	1
3	Dh50	遺土	土器(片)	1.5×1	暗褐色	シルト質	粘性	1	1	0.3	1	1	1

Dj56遺構 (第180図) (遺構の確認) 調査地の南寄りのほぼ中央のIII層上面である。

基盤が西南方に緩やかに傾斜しはじめる部分にあたる。かなり浅い。

[重複・増改築の事実] 極めて浅いので不明である。

[平面形・方向] 長辺2.5m×短辺2.1m×深さ0.1mの大略長方形をなし、長軸方向は磁北よりわずかに東にふれる。

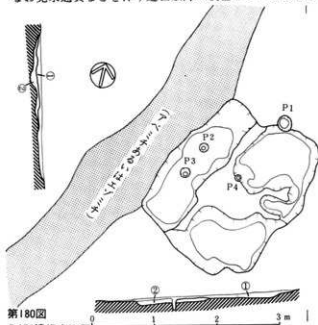
[堆積土] 暗褐色シルト質土が浅く見られる。部分的にはIII層土を一度掘りおこしている。

[床面] 凹凸に富み、三ヶの掘り込みの集合体のように見える。他にピット類が4ある。

これ以外の特殊な現象は観察できない。年代・性格ともに不明である。

なお遺構西北辺に沿って帯状の凹みが走る。伝承によると「アベミチ(安倍道?)。あるいは「エゾミチ(蝦夷道?)。なる古道の痕跡であるという。

なお寛永通寶などを伴う近世以降の墳墓については省略する。



第180図
Dj56遺構実測図

	上 径	底 径	深さm
P ₁	0.3×0.2	0.15×0.15	0.3
P ₂	0.15×0.15	0.7×0.7	0.19
P ₃	0.15×0.15	0.7×0.7	0.25
P ₄	0.7×0.7	0.5×0.5	0.2

①	暗褐色土、シルト質、粘性、しまりあり
②	黄褐色土、III層土が動いたもの

4 鑑定・分析結果

A 植物遺存体 (図版30) E c 62住居跡床面焼土中よりクリ(ふな科)、E e 68住居跡床面上ピット中よりトチノキ(とちのき科)のそれぞれ炭化した種実を検出した。とりわけ後者は比較的少量に残存し、縄文時代中期における食料貯蔵の好例となろう。ただし炭化の理由は不明である。以上の種実の同定は村井三郎氏による。

渡辺誠氏によると、トチノキは主に東日本に分布しており、23の縄文時代遺跡から検出されており、晩期の遺跡が多い。ドングリなどと同様に特殊泥炭層を形成する 경우가多く、青森県是川、埼玉県真福寺などがその例である。上限例は後期中葉であり、それ以前は断片的資料でアク抜き技術の存在を推定させるほどのものはない、とのことである。(註1)本出土例はその上限をさらに引きあげさせる一例となる。

さらに安田喜憲氏は、縄文時代中期の内陸部における炉の大型化を、ドングリ類(コナラ・ミズナラ)とトチノキ類のアク抜きと相関させて解釈している。ドングリとトチは加熱してアクを抜くが、その際に木灰とともに加熱し、非水溶性のアクを中和し流す必要があるとの考え方である。本遺跡の時期は炉の大型化への動きがやや見え始めた時期で、氏のいう時期より若干古いのが、傾聴すべき説であろう。(註2)

註1) 渡辺 誠 食生活の変遷 古代史発掘2 縄文時代1 縄文土器と貝塚 講談社 昭和53年4月

註2) 安田喜憲 環境考古学事始 日本列島2万年 NHKブックス365 日本放送出版協会 昭和55年

B 炭化材の樹種について 遺構内に検出された炭化材について、肉眼的観察による樹種の同定を試みた。同定は岩手県木炭協会製炭経営指導員、早坂松次郎氏に依頼した。以下にその結果を示す。文章化は整理者によるものである。

(1) E d 62住居跡 (炉 中) 細片のため不明な点が多いが、ケヤキの類を含む。

(2) " (ピット) 同様の理由で不明な点が多いが、主体をなすクリと思われるものの中に、ケヤキと思われるものが若干量混じる。

(以上は既に明らかにしたとおり、縄文時代中期の堅穴住居跡であった。以下は古代、とりわけ平安時代と思われる住居跡である。)

(3) C f 65住居跡 (カマド焚きロー床面) 比較的大型の試料であり同定のためには好適なものであった。クリ・ケヤキ・シロタモなどのタモノキの類の三種を少なくとも含む。所謂雑木類である最後者が量的に多いらしい。

(4) D e 50住居跡 (煙出し部底面) 細片のため不明な点が多いが、クリを含むことは確実に

ある。

氏による同定は以上のとおりである。

「岩手県植物誌」(註)によると、本遺跡を含む地域(盛岡～花巻間の北上川河西部)の植生分布は大略以下のとおりである。

(1) 高山帯ハイマツ・高山植物林、(2) 温帯山地ブナ・ミズナラ林、(3) 温帯低地アカマツ・コナラ林、(4) 牧野、(5) その他に、人工造林地としての植林地、などがある。そのそれぞれをやや詳述する。分布の広いもののみをとりあげる。

(3)は山麓部に比較的限定して分布する。アカマツ、コナラ・クリ、コナラとクリ林地帯の南半部に伴うことの多いケヤキなどが含まれる。なおコナラ・クリ林を構成する植物の一部は、コナラ・ヤマハンノキ・カシミザクラ・アズキナシ・ミズナラ・カシワ・ナツハゼ・ヤマツツジ・ガマズミ・ハシバミ・ホツツジ・ウロジロノキ・タニウツギ・マルバアオダモ・オオバクロモジ・トリアシショウマ・アキノキリンソウ・ヒカゲスゲ・チゴユリ・イヌヨモギ・ワラビ・タガネソウ・オケラ・ウマノアシガタ・オカトラノオ・ススキ、などがある。

(2)は奥羽山地の大半を占め、もっとも広範に分布している。具体的には次のようになる。

(a) ミズナラ林・コナラ・クリ林より上位に、純林状もしくはブナとの混交林をなす。コナラと同様に伐採による二次林に出てくる。奥羽山地においては海拔200～400m以上800m位まで分布する。ミズナラ林においては、ミズナラ・ヤマハンノキ・ハウチワカエデ・アオダモ・ムシカリ・ツノハシバミ・ミヤマガマズミ・ノリウツギ・オオバクロモジ・ヤマツツジ・ツクシハギ・アクシバ・チゴユリ・アキノキリンソウ・ヒカゲスゲ・トリアシショウマ・ワラビ・ダケゼリ

(b) ブナ・ミズナラ林 これはブナ純林下部の沢に面した急斜地に沿って広く分布する。ブナ・ミズナラ林の下降限界は奥羽山地では海拔400～500mである。ここには、ブナ・ミズナラ・アオダモ・ハウチワカエデ・ウワミズザクラ・ムシカリ・オオバクロモジ・ハイイヌガヤ・ツノハシバミ・ミヤマガマズミ・ノリウツギ・アキノキリンソウ・ミヤマカンスゲ・チゴユリ・マイズルソウ・シシガシラ・オシダ・シノブカグマ・ヤマソテツ・ナライシダ・ゴトウヅル・ツタウルシ・イワガラミ・ヤマブドウなどの植物が見られる。

(c) ブナ林 これは温帯山地林の代表種である。奥羽山脈でも原始植生も下部ではミズナラと混じり、上部に純林が発達する。本県のブナ純林の残存林の主なものはブナ・チシマザサ型であり、裏日本型となる。ブナ林には、ブナ・ハウチワカエデ・アオダモ・コシアブラ・ウワミズザクラ・チシマザサ・オオバクロモジ・ムシカリ・ツノハシバミ・ノリウツギ・ヒメアオギ・ナイイヌガヤ・ミヤマカンスゲ・ホソバノトウゲシバ・ツルシキミ・ユキザサ・ツルアリドシ・シシガシラ・ナライシダ・シノブカグマ

(d) 沢通林 温帯低地の沢部と同様あるいはそれ以上に、沢部にサワグルミトチノキカツラ林が発達する。この具体相は複雑（サワグルミの多い所・トチノキの多い所・カツラの多い所・いずれか2種または3種の混じた所）である。ここの植物には、サワグルミ・トチノキ・カツラ・ヤマモミジ・ニワトコ・キブシ・ヤマグワ・サンショウ・ウリノキ・オオバクロモジ・ヤグルマソウ・ミヤマイラクサ・ホウチャクソウ・モミジガサ・タマブキ・オシダ・ジュウモンジシダ・リョウメンシダ・イノデ・ヨブスマソウ・クルマバソウ・ウワバミソウ・クルマムグラ・ミゾシダ・ヤマブドウ・ツルウメモドキ・シラクチヅル・イワガラミ・ゴトウヅル・ツタウルシなどがある。

(e) シラクシバミ林 奥羽山脈では400~1000mの間に分布し、岩手山以北に集団がある。

(f) スギ林 奥羽山地においては温帯山地林以上の森林と混交し、もっとも面積の大きいのはブナ・ミズナラ林である。

(g) ヒノキ・アスナロ林 これも他と混交するが、もっとも多いのがヒノキ・アスナロ・ブナ・ミズナラ型である。

(h) キタゴヨウ林 奥羽山脈では、県境から出る沢の兩岸急斜岩石地に見られる。

日本における森林は人工が加えられてから久しく、二次林化していると思われ、縄文時代の植生との短絡的比較は慎まねばならないが一応以上のものをあげておく。それらと比較すると、本遺跡検出の炭化材・炭化種実の種別はそれらと何ら矛盾は無いと思われる。

註 IV 岩手県の植生概要 岩手県植物誌 岩手植物の会 編集・発行 昭和45年9月

C 放射性炭素による年代測定結果 下記の2資料の測定を行なった。測定は日本アイソトープ協会に依頼した。前者は平安時代、後者は縄文中期であり、従来の結果と大略一致するものであろう。ただし前者は若干古い感がないでもない。

OW74 D e 50住 1230±75 Y B・P. (1200±70 Y B・P.)

OW74 E e 68住 4170±85 Y B・P. (4050±80 Y B・P.)

D 岩石学的方法による土器胎土分析 これについて照井一明氏に依頼した。次にその結果を示す。

D 岩石学的方法による土器の胎土分析結果 照井一明

I はじめに 土器の製作地推定のため、岩石学的方法で分析を行なった。

II 試料 第7表、第181・182図のとおりである。

III 分析方法

第7表 胎土分析用試料一覧

No.	遺跡名	遺溝名	種別	技法	備考
1	盛岡 太田方八丁	R h 06住 床	須忠器 坏	へう切 or へう削り	志和城鑑定地 官街遺跡内の住居跡
2	水沢 胆沢 城	C 区 S D 190 9層下部	" "	口縁部	官街
3	江刺 瀬谷子		" "	回転糸切・無調整	窯跡
4	北上 藤沢		" "	" "	"
5	紫波 杉の上		" "	回転へう切・無調整	"
6	水沢 見分森		" "	口縁部	"
7	" 南矢中	B c 71住	" "	へう切り	聚落跡
8	" 石田	D a 30住	" "	口縁部	"
9	" "	B j 65住 P 6	" "	体部	"
10	" "	C h 71遺溝	江別式?	"	集落跡内の堀り込み
11	" 西大畑	C j D a 27 I b	須忠器 甕	"	集落跡内の包含層
12	" "	C f 53住	土師器? "	" ロクロ成形	集落跡、酸化焙焼成
13	" 今泉	C a 09住 埋土	須忠器 甕	"	"
14	" "	A i 62住	土師器 坏	口縁部 ロクロ成形	" 酸化焙焼成
15	" "	B d 12住 埋土	須忠器 甕 体部	"	"
16	金ヶ崎町 鳥ノ海 A	5号住 床	土師器? 坏	回転糸切・無調整	" 酸化焙焼成
17	" 鳥ノ海 B	B g 62住	須忠器 坏	口縁部	"
18	" 西根	B a 71住 埋土	" "	"	"
19	" "	C f 03 pit	土師器? "	"	" 酸化焙焼成
20	" 上餅田	B c 62住 No28	土師器 "	丸底・ミガキ・内黒	" "
21	" "	C c 53住 No19	須忠器 甕 体部	"	"
22	石島谷 大地渡	C f 65住	" 坏	口縁部	"
23	" "	D e 50住 Q 2	土師器? "	" ロクロ成形	" 酸化焙焼成
24	" "	" "	土師器 "	"、ロクロ成形、内黒	" "
25	水沢 袖谷地	B i 15住	須忠器 甕 体部	"	"

- ① 試料25個をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。
- ② 偏光顕微鏡を用い鉱物組成、特徴、岩片の種類及び構成を調べた。
- ③ 1つの試料について500~1000個の粒子について検討を行なった(0.05mm以下の鉱物は基質として扱った)。
- ④ 鉱物、岩種別構成から、粘土の産地の地質を推定し、製作地を考察した。

IV 結果

- ① 各試料の鉱物組成、岩片構成、特徴は第7表以下、第183図以下のとおりである。
- ② 灰色・緻密で硬い須恵器は、かなりの高温(トリデマイト、ムライトが生ずる以上の温度)で焼かれたことが確認された。
- ③ どの土器についても、石英・斜長石の鉱物の破片結晶が大半を占め、少量の輝石、角閃石、黒雲母の他に、ジルコン・ザクロ石・リン灰石・ルチル鉄鉱を含むことがある。
- ④ 岩片としては、チャート・珪岩・ホルンフェルス・花崗岩・花崗斑岩・アブライト及び安山岩が含まれる。
- ⑤ 共存する岩片や顕微鏡下の特徴から推定すると、石英・斜長石・黒雲母・角閃石は、ほとんどが花崗岩起源であり、ジルコン・リン灰石なども花崗岩中によく含まれている鉱物である。これらの鉱物は全く円磨された証拠は認められない。
- ⑥ 輝石類の供給源は、多くが自形の柱状結晶であること、変質が少ないこと、脱ガラス化しない新鮮な火山ガラスと共存すること、安山岩片はかなり少ないこと、などから考えると、ローム起源であることが推定される。
- ⑦ 粘土の供給源としては、チャート・ホルンフェルス・珪岩などからなる古生層と、花崗岩類が分布し、さらに安山岩質のロームに覆われる地域が推定される。
- ⑧ 肉眼のおよび顕微鏡の特徴から8つのタイプに区分された。

Type A：灰色・緻密、硬く、石英、長石類を主とし輝石を伴う。岩片としてはチャート・ホルンフェルス・花崗岩を含む。

試料No.1・4・6・8・9・11・13・17・18・22

Type B：Type Aに鉱物、岩片の組成が類似するが、少々異なり、色や製作上の技術にも差が見られるタイプ。

試料No.3・5・7・15・16・19・20・25

Type C：輝石安山岩、文象斑岩の岩片を多量に含むタイプ。試料No.10。

Type D：レンガ岩で軟かく、チャート・ホルンフェルス岩片と、石英・長石類より構成され輝石を含まない。試料No.12。

Type E：レンガ色、緻密、細粒で硬く、石英・長石類で構成され、有色鉱物を含まないタイプ。

ブ。 試料No14。

Type F：こげ茶色で花崗岩起源の石英・長石及び珪岩から構成されるタイプ。 試料No21。

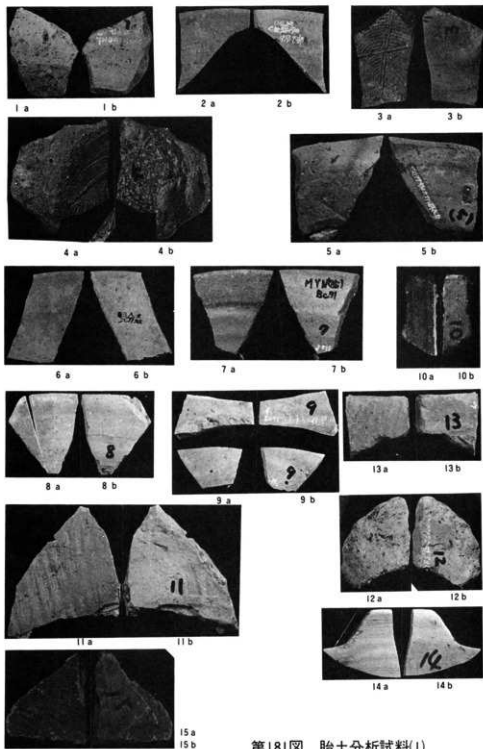
Type G：黒雲母・角閃石・ホルンフェルス・花崗岩などから構成されるタイプ。

試料No23・24。

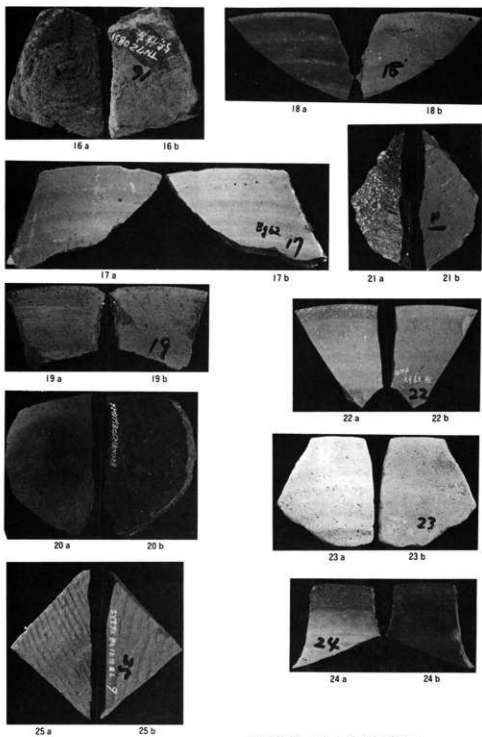
Type H：灰色・緻密・輝石・角閃石の有色鉱物と、流紋岩・ホルンフェルス・チャート岩片を含むタイプ。 試料No 2。

各タイプの供給源は、Type A・Bは古生層・花崗岩・ローム、Type Cは輝石安山岩・花崗岩類、Type D・E・F・Gは古生層・花崗岩、Type Hは古生層・花崗岩・酸性火山岩地帯である。

Type AやBのように、異なる時代及び比較的離れた地域で、同種あるいは類似のものが見られる点は非常に興味ある問題を含んでいる。今後さらに時間的、面的な試料の分析を行ない、検討することが大切になろう。

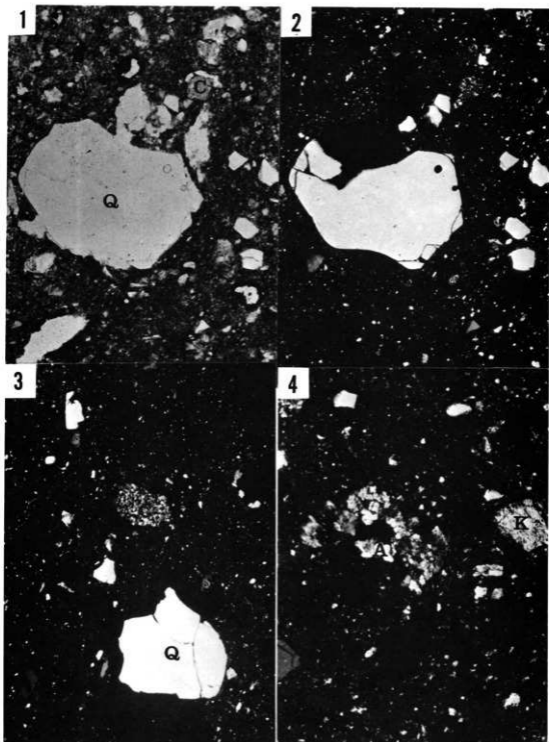


第181図 胎土分析試料(1)



第182図 胎土分析試料(2)

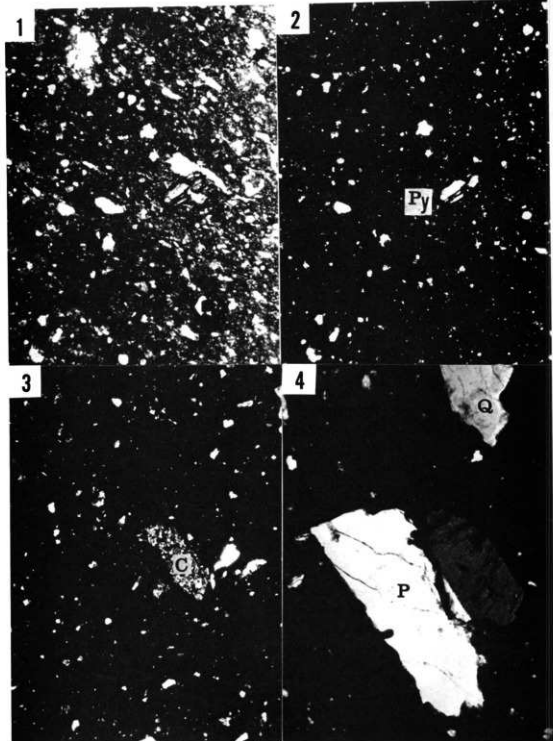
Plate I



No. 1、須恵器(坏)、出土地：盛岡市太田方八丁

- 1：多量の石英と斜長石、カリ長石結晶破片のほかにチャート破片を含む。(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：チャート岩片。(直交ニコル)
- 4：アブライト岩片。(直交ニコル)

Plate 2



No 3、須恵器(坏), 出土地: 江刺市瀬谷子

1: 石英、斜長石の破片結晶と斜方輝石の柱状結晶より構成される。

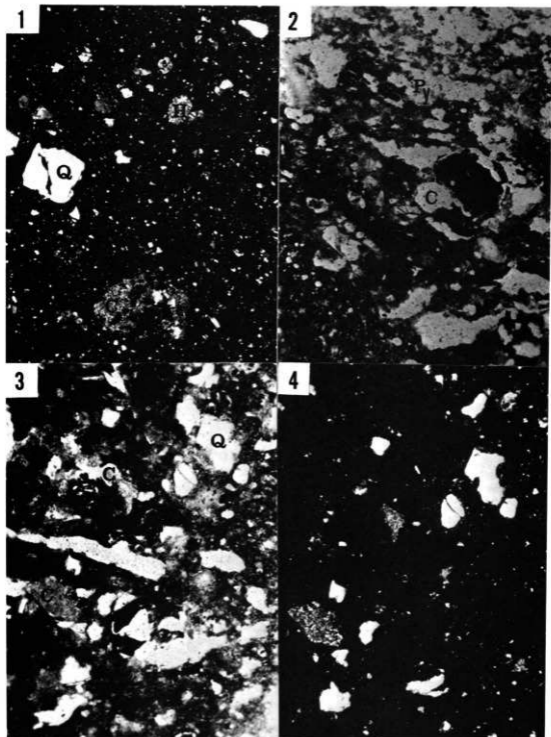
斜方輝石は鉄鉱質の反応線を持つことが多い。(平行ニコル)

2: 同上。(直交ニコル)

3: チャート岩片。(直交ニコル)

4: カールスバト双晶を示す斜長石と石英の破片結晶。(直交ニコル)

Plate 3



No. 2、須恵器(坏)、出土地：水沢市胆沢城

1：多量の石英（一部に高温石英）と長石類の破片結晶、及びチャート、ホルンフェルス岩片を含む。（直交ニコル）

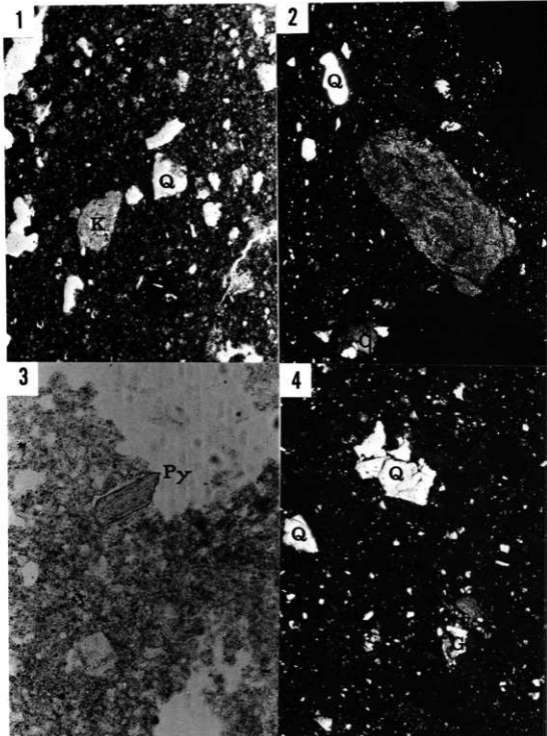
No. 4、須恵器(坏)、出土地：北上市藤沢

2：石英と少量の長石類の破片結晶、及び多量のチャート岩片より構成される。柱状の斜方輝石が見られる。（平行ニコル）

3：同上。（平行ニコル）

4：同上。（直交ニコル）

Plate 4



No 5、須恵器(坏)、出土地：紫波郡杉ノ上

1：多くの石英と長石類の破片結晶より構成される。長石類はかなり変質している。(平行ニコル)

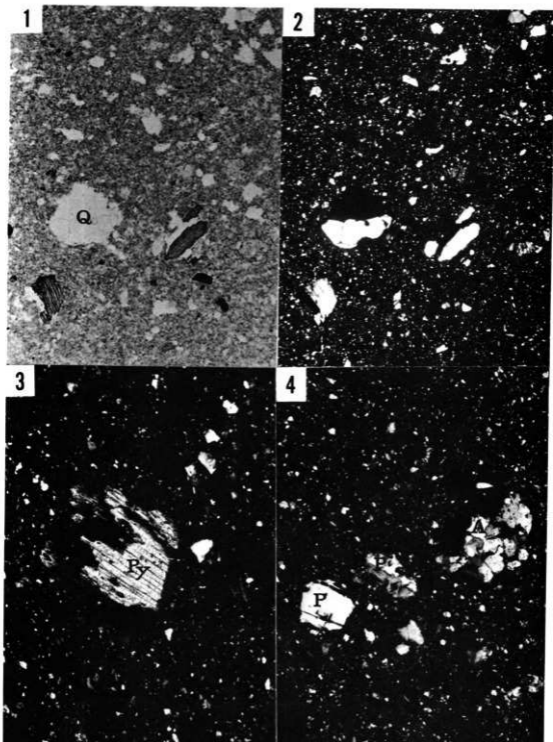
2：大小の多くのチャート岩片と珪岩の破片がみられる。(直交ニコル)

No 9、須恵器(坏)、出土地：水沢市石田

3：普通輝石の自形柱状結晶、ローム起源。(平行ニコル)

4：石英、斜長石の破片状結晶の他に、チャート、花崗珪岩などの岩片から構成される。
(直交ニコル)

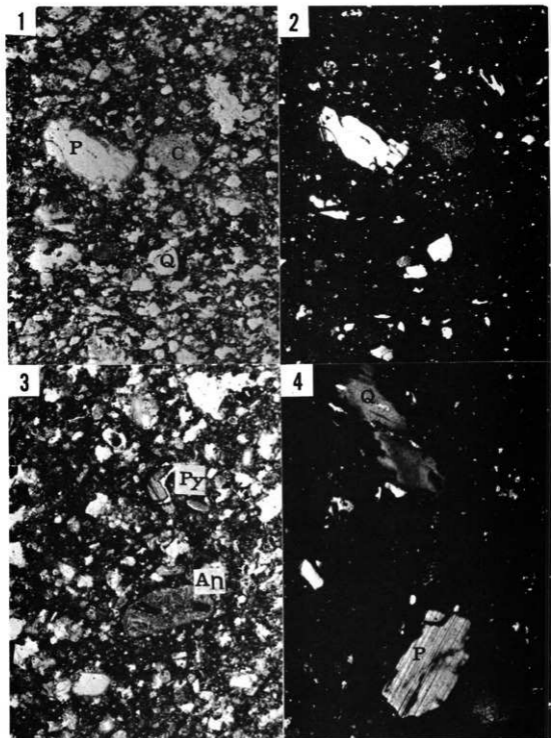
Plate 5



No 5、須恵器(坏)、出土地：水沢市見分森

- 1：石英、斜長石の破片結晶と自形の斜方輝石より構成される。(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：斜方輝石。(直交ニコル)
- 4：アプライト岩。(直交ニコル)

Plate 6



No. 7、須恵器(坏)、出土地：水沢市南矢中

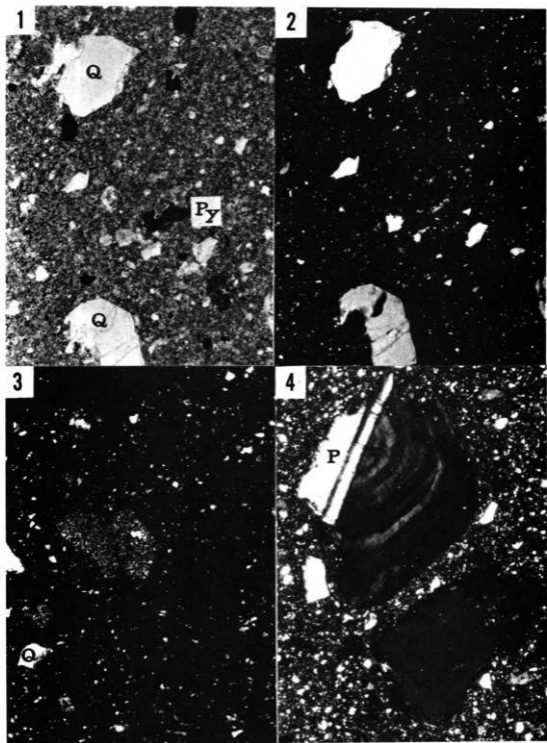
1：石英、斜長石の破片結晶とチャート岩片がみられる。(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：まれにガラス質安山岩岩片を含む。(平行ニコル)

4：波動消光を示す花崗岩起源の石英と、アルバイト双晶を示す斜長石。(直交ニコル)

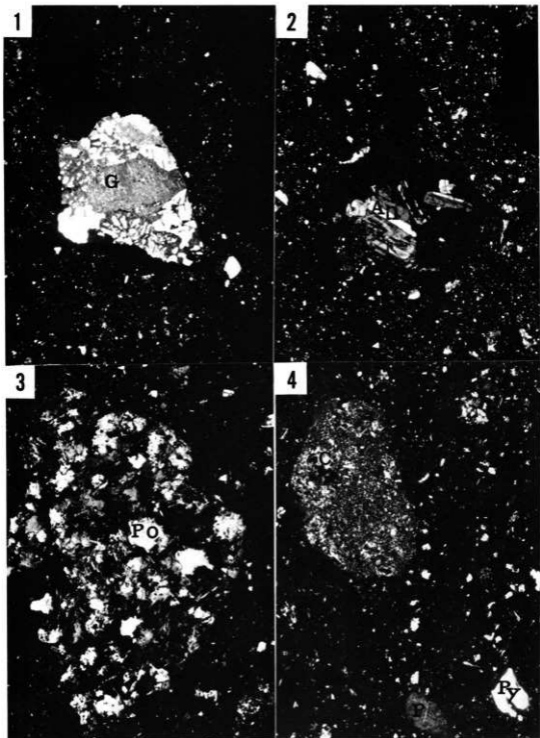
Plate 7



No. 7、須恵器(坏)、出土地：水沢市石田

- 1：石英、斜長石の破片結晶と少量の斜方輝石などから構成されている。
鉄鉱（黒色）がかなり含まれる。（平行ニコル）
- 2：同上。（直交ニコル）
- 3：チャート岩片。（直交ニコル）
- 4：累帯構造を呈する斜長石と石英（消光している）。（直交ニコル）

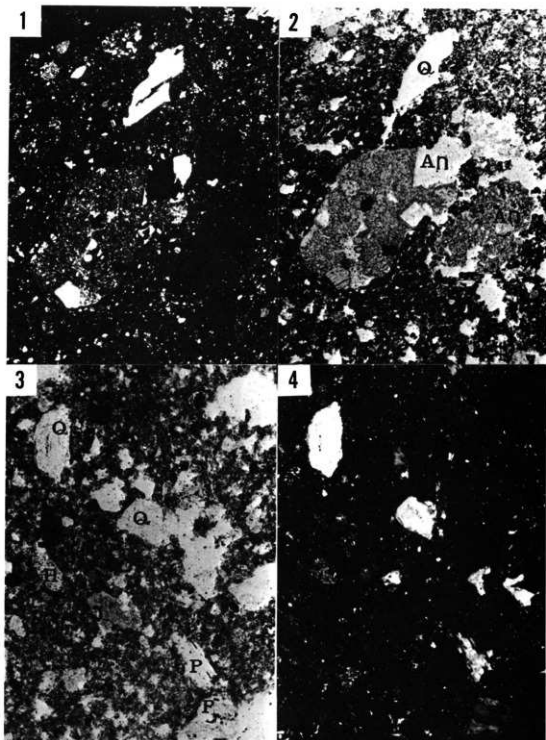
Plate 8



No.10、江別式土器、出土地：水沢市石田

- 1：文象斑岩。石英とカリ長石のみごとな微文象構造を示す。（直交ニコル）
- 2：輝石安山岩。斜長石の斑晶が多く、石塞は針状の長石の結晶からなる。（直交ニコル）
- 3：石英玲岩。（直交ニコル）
- 4：石英、斜長石、斜方輝石の他、チャート、ホルンフェルスの岩片が多い。（直交ニコル）

Plate 9



No.10、江別式土器、出土地：水沢市石田

1：斜方輝石安山岩。（直交ニコル）

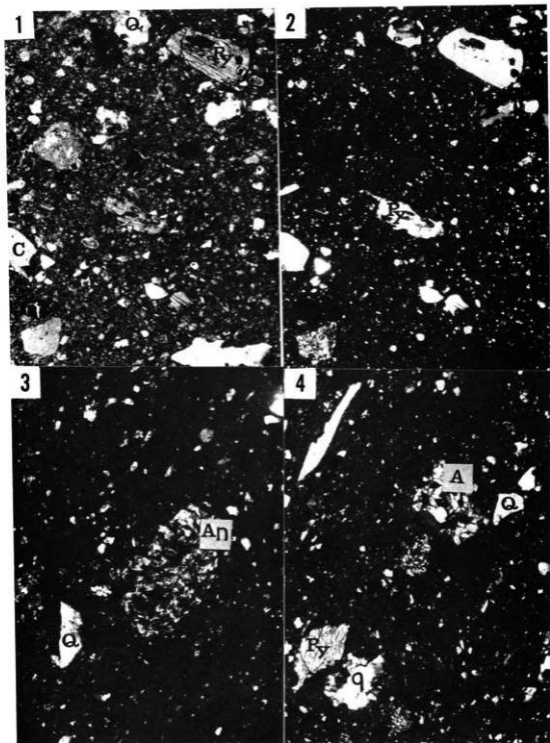
2：同上。（平行ニコル）

No.12、土師器（甕？）、出土地：水沢市石田

3：花崗岩起源の石英、斜長石の破片結晶とチャート、ホルンフェルスなどの破片からなる。
（平行ニコル）

4：同上。（直交ニコル）

Plate 10



No.11、須恵器(徳)、出土地：水沢市西大畑

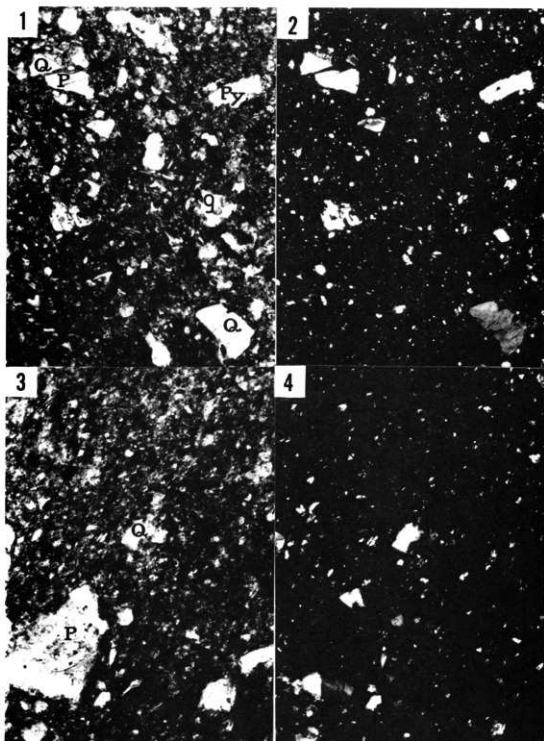
1：石英、斜長石、斜方輝石のほか、チャート、ホルンフェルスなどの岩片を含む。
(平行ニコル)

2：同上。(直交ニコル)

3：輝石安山岩。(直交ニコル)

4：珪岩およびアブライト岩。(直交ニコル)

Plate 11



No.13、須恵器(坏)、出土地：水沢市今泉

1：石英、斜長石、斜方輝石、単斜輝石の結晶片とチャート、珪岩などの岩片から構成される。
火山ガラスを多く含む。(平行ニコル)

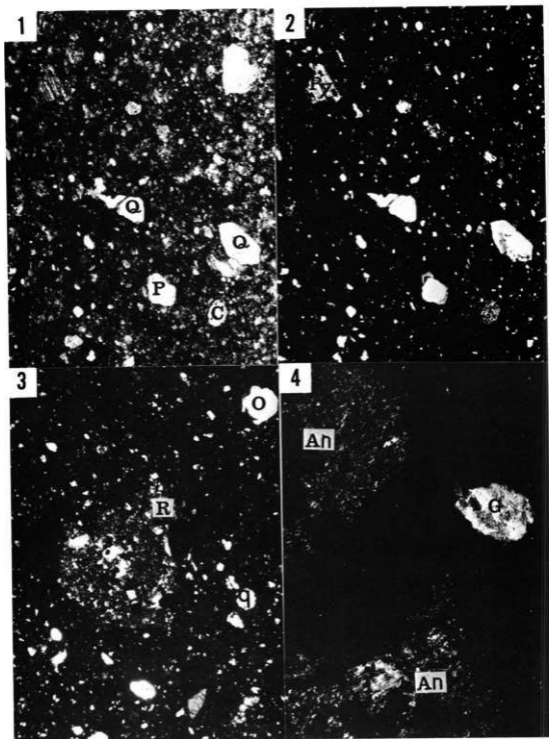
2：同上。(直交ニコル)

No.4、土師器(坏)、出土地：水沢市今泉

3：石英、斜長石の細やかな破片結晶より構成される。岩片としてチャートが含まれる。
(平行ニコル)

4：同上。(直交ニコル)

Plate 12



No.15、須恵器(甕)、出土地：水沢市今泉

1：石英、斜長石、斜方輝石の破片結晶とチャート岩片より構成される。少量のリン灰石も含まれる。(平行ニコル)

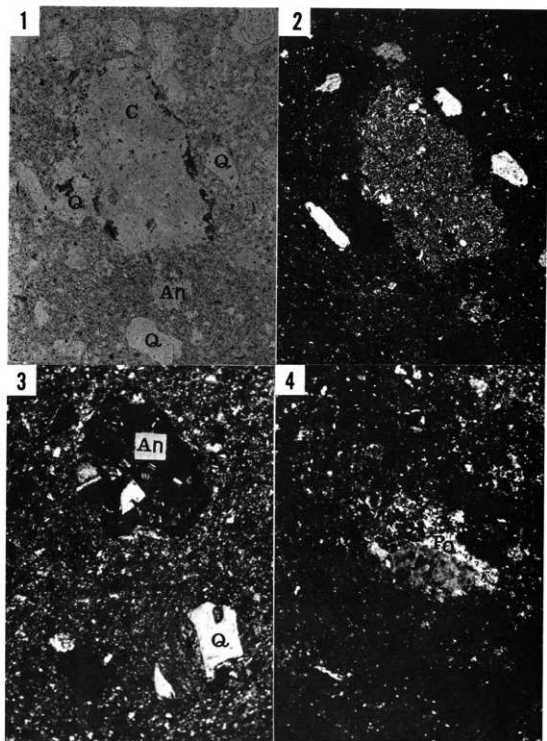
2：同上。(直交ニコル)

3：流紋岩(?)岩片。(直行ニコル)

No.19、土師器?(坏)、出土地：金ヶ崎町西横

4：多量の輝石安山岩、及び花崗岩片を含む。(直交ニコル)

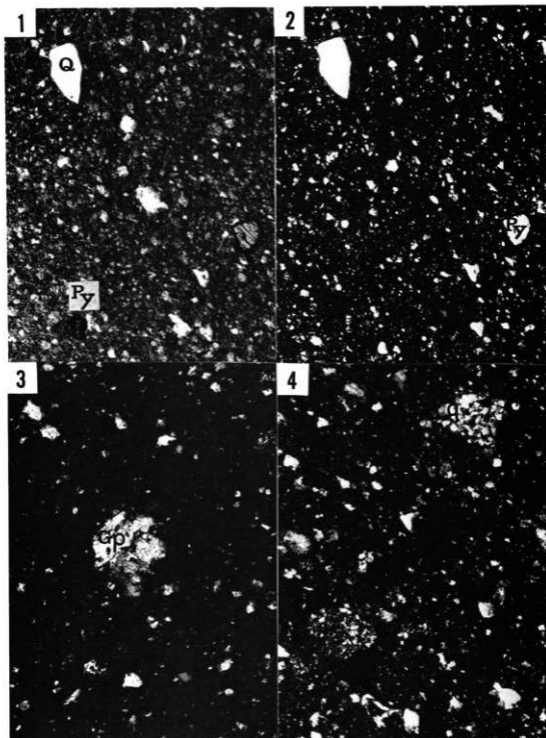
Plate 13



No.16、土師器？(甕)、出土地：金ヶ崎町島ノ海A

- 1：石英、斜長石の破片結晶とチャート、安山岩などの岩片からなる。(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：ガラス質安山岩、脱ガラス化は全くみられない。(直交ニコル)
- 4：珪岩。(直交ニコル)

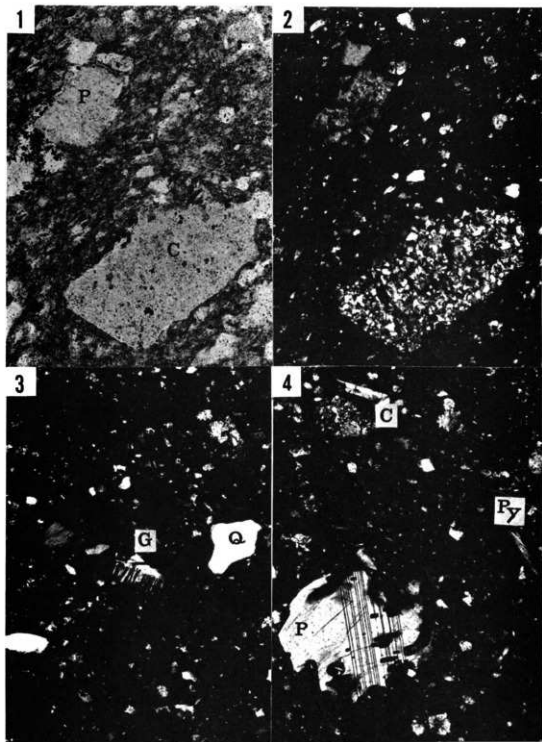
Plate 14



No.17、須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町島ノ海B

- 1：石英、斜長石、斜方輝石の結晶の破片が多い。斜方輝石は鉄鉱の反応線を有する。
(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：花崗斑岩の岩片。(直交ニコル)
- 4：チャート、及び珪岩の岩片。(直交ニコル)

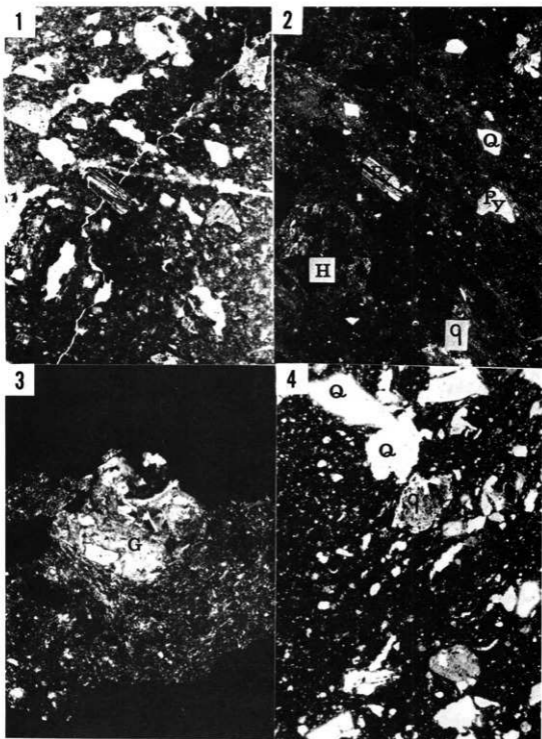
Plate 15



No.18、須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町西根

- 1：石英、斜長石、斜方輝石の結晶やチャート、珪岩、花崗斑岩などの岩片より構成させる。
(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：微文象構造のみられる花崗斑岩の岩片、花崗岩起源の波動消光を示す石英も含まれる。
(直交ニコル)
- 4：溶融形を示す斜長石、および柱状の斜方輝石。(直行ニコル)

Plate 16



No 20、土師器(坏)、出土地：金ヶ崎町土耕田

1：石英、長石の他、火山灰起源の自形の斜方輝石がみられる。チャート、ホルンフェルス、珪岩、花崗岩の岩片も共に認められる。(平行ニコル)

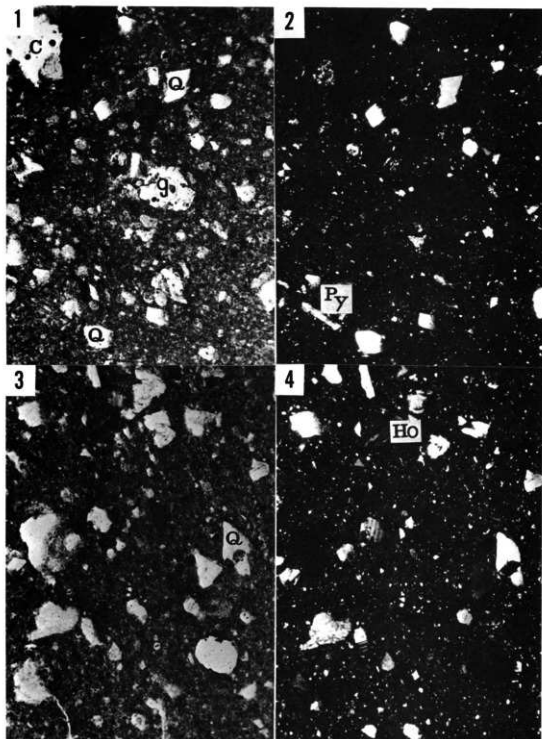
2：同上。(直交ニコル)

3：花崗岩質岩片。(直交ニコル)

No 21、須恵器(坏)、出土地：金ヶ崎町土耕田

4：多量の石英と斜長石の破片、および珪岩の岩片がみられる。(平行ニコル)

Plate 17



No.22、須恵器(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

1：石英、斜長石、輝石の結晶のほか、チャートの岩片が多くみられる。火山ガラスも散点している。(平行ニコル)

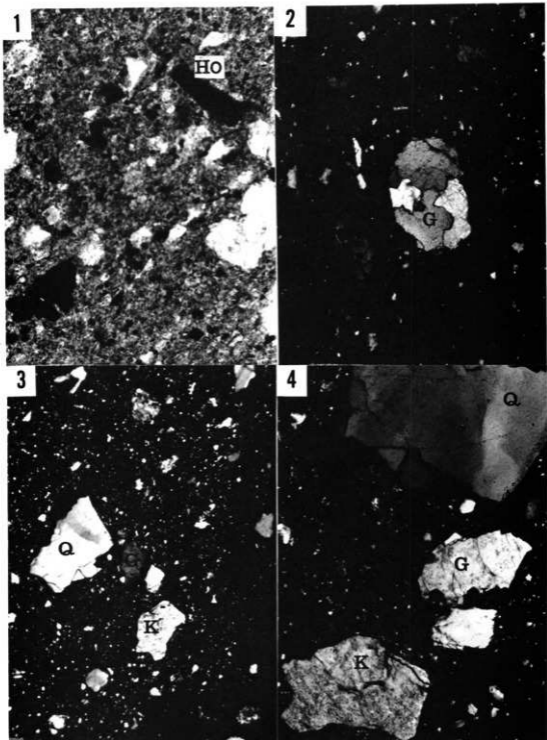
2：同上(直交ニコル)

No.23、土師器？(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

3：石英、長石、角閃石、黒雲母などから構成される。ほとんどの結晶が破片状である。(平行ニコル)

4：同上。(直交ニコル)

Plate 18



No.23、土師器？(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

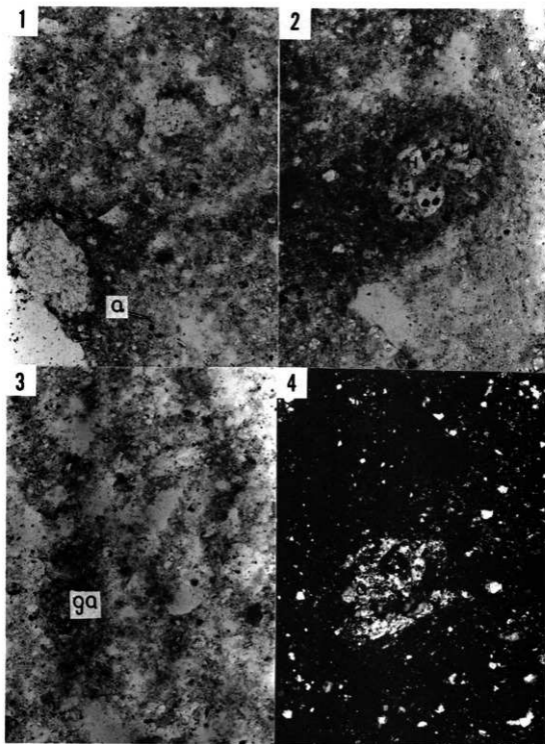
1：角閃石の柱状結晶、基質には微小な鉄鉱やジルコンなどがみられる。(平行ニコル)

2：花崗岩岩片。(直交ニコル)

3：花崗岩岩片と石英、及びカリ長石の破片状結晶。(直交ニコル)

4：3を拡大、石英は波動消光を示し、カリ長石はかなり変質している。両者は花崗岩が源岩である。(直交ニコル)

Plate 19



No.24、土師器(坏)、出土地：石鳥谷町大地渡

1：石英の破片状結晶を主とし、少量の斜長石を伴なう。さらに微細なザクロ石、リン灰石、ジルコンなどの自形結晶が認められる。

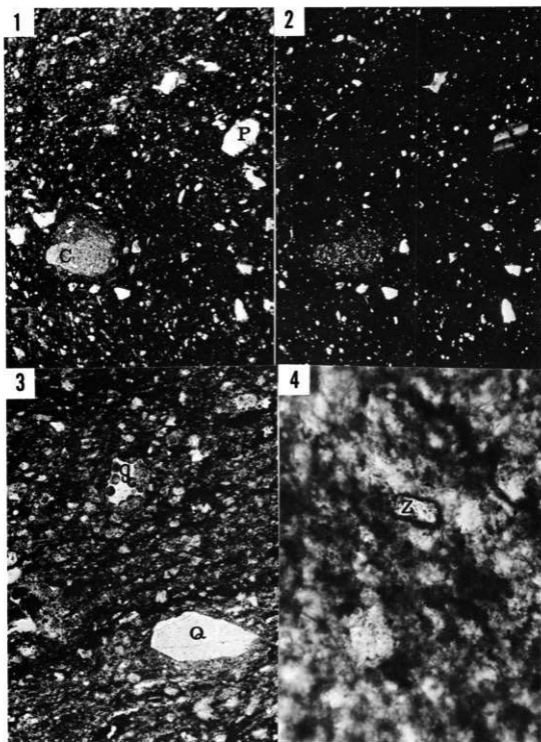
岩片としては、チャート、ホルンフェルス、花崗岩などの岩片がみられる。(平行ニコル)

2：ホルンフェルス岩片。(平行ニコル)

3：粒状で高い屈折率を呈しているが、ザクロ石、柱状のものが主に、ジルコンとリン灰石である。(平行ニコル)

4：花崗岩岩片、かなり変質している。(直交ニコル)

Plate 20



No.25、須恵器(坏)、出土地：水沢市袖谷地

- 1：石英、斜長石の鉱物破片とチャート岩片を含む。(平行ニコル)
- 2：同上。(直交ニコル)
- 3：多孔質の火山ガラスがみられる。脱ガラス化をしておらず新鮮である。(平行ニコル)
- 4：ジルコンの柱状結晶。無色。円磨されていない。(直交ニコル)

E 蛍光X線法による土器の胎土分析結果 Dと同一試料を蛍光X線分析法により胎土分析を行なった。諸般の事情から定性分析のみを試みた。したがって特別な意見を付さない。分析は岩手県工業試験場に依頼した。第9表としてその結果を掲げる。

第9表 須恵器、土師器、縄文土器の蛍光X線法による定性分析結果

No	検 出 元 素										
	A s	S i	K	C a	T i	M n	F e	N i	Z n	S r	Z r
1	○	○	○	○	○		○			○	○
2	○	○	○	○	○		○				○
3	○	○	○	○	○	○	○			○	○
4	○	○	○	○	○	○	○			○	○
5	○	○	○	○	○		○				○
6	○	○	○	○	○	○	○			○	○
7	○	○	○	○	○		○			○	○
8	○	○	○	○	○		○			○	○
9	○	○	○	○	○		○			○	○
10	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
11	○	○	○	○	○	○	○			○	○
12	○	○	○	○	○		○			○	○
13	○	○	○	○	○		○		○	○	○
14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	○	○	○	○	○		○		○	○	○
16	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
17	○	○	○	○	○		○		○	○	○
18	○	○	○	○	○				○	○	○
19	○	○	○	○	○		○				○
20	○	○	○	○	○	○	○		○		○
21	○	○	○	○	○	○	○			○	○
22	○	○	○	○	○		○			○	○
23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	○	○	○	○	○		○		○	○	○
25	○	○	○	○	○					○	○

(測定条件)

対陰極：W、Cr、分光結晶：Lif、EDDT、電圧・電流：50KV、40mA、時定数：1sec
 カウント・フルスケール：10⁴ cps、検出器：シンチレーション計数管

備 考

須恵器、土師器、縄文土器 (No6~30) の分析結果について、
 蛍光X線法による分析では、含有する元素に特徴的なものは見出されなかった。

分析結果に関する若干の問題提起

胎土分析の結果は以上のとおりである。分析の目的は古代各期の土器流通検討の基礎資料の蓄積にある。現状での即断は避け、提起された新しい問題点のみをあげておく。

(1) 素地粘土の供給源に、北上川河東の地域が想定されるものが多い。それは奥羽山脈直近の大地渡出土のものにも該当するところであった。したがって製品のみならず、素地粘土の移動の可能性をも想定する必要がある。今後は北上河東の粘土の分析が不可欠となる。さらに、既検出の須恵器窯跡周辺地域の粘土の分析も当然必要である。なお高橋文明氏によると、江釣子村（北上市藤沢窯跡と同一段丘崖・その西方）にも平安時代初期（ヘラ切り・無調整）の窯跡の存在が考えられる由である。

(2) 奈良時代末期集落出土の須恵器の素地粘土の供給源も同様に想定されたところから、該期における須恵器の在地（岩手県南部）生産の可能性をも想定する必要がある。これは既に沼山源喜治氏の発表されたところでもあった。宮城県北の資料の分析・比較、窯跡そのものの調査などが必要である。

(3) 江別式土器も同様であった。この種土器の製作者に一定の定着性を想定できることとなり、従来から看取された^{*)}土着的要素の背景説明の一つとなしえよう。土師器類と比較し、その含有物が大きく異なる事実もあり、東北地方出土の同種資料・土師器・弥生式土器などとの比較が必要となろう。

(4) より基礎的作業とし、(1)で述べた粘土類の、耐火性その他の須恵器の素地粘土としての適否の分析・確定を急ぐ必要もある。

(5) 分析対象器種をさらにふやす必要がある。とくに円筒殖輪などの分析も不可欠である。

(註)

本筆ではあるが、試料を提供された北上市教育委員会・江刺市教育委員会・水沢市教育委員会に深甚の謝意を表する。

これらの協力なしには本試みはなしえなかったであろう。

たお北上川の流路の変遷も検討されるべき一課題なることはあえてふれるまでもない。

5 結 語

- (1) 本遺跡は縄文時代中期中葉～後葉の集落跡と、平安時代の集落跡である。
- (2) 検出された遺構のうち、前者のものは縄文時代中期中葉末頃の集落の様相の一部を示し、後者は、本地域における平安時代住居跡の数少ない類例をなす。
- (3) 出土遺物は上記2時代の土器組成・石器組成等を良好に反映する。
- (4) 使用石材・素地粘土の特徴から、上記2時代の物資流通の一端を窺いうる。
- (5) 炭化材・種実等は、上記2時代の植生の一端を窺わせる。

野^の田^だ遺跡

遺跡名：野田（略号ND73）

遺跡所在地：稗貫郡石鳥谷町大興寺字野田

調査期間：昭和48年11月7日～11月11日

調査対象面積：1,800㎡

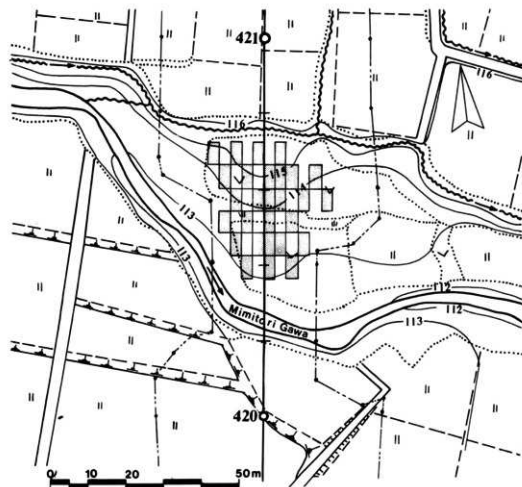
発掘調査面積：500㎡

I 遺跡の位置と立地

本調査地区は、稗貫郡石鳥谷町大興寺字野田に所在している。国鉄東北線石鳥谷駅の西南西約3.5kmに位置し、大興寺部落の耳取川に掛かる桜田橋の北西約120mの地点である。

調査地区の南端は耳取川の北岸に接し、西側は耳取川の川原。東側は水田。北側は水田で、調査地区と北側水田との境には農業用水路があり、耳取川と農業用水路の間約50m、東西約30mの小規模な畑地が本調査地区で、南へ舌状に張り出した緩傾斜地になっており、低位の花巻段丘面である。標高は南端で113m。北端で約115mである。

本調査地区の南約600mには上台遺跡。北約2kmには大瀬川古館遺跡。北約2.5kmに大瀬川田屋遺跡がある。



地形・グリッド配置図

II 調査の経過と結果

本調査地区は、昭年47年度の分布調査の際に発見され、遺跡として登録されている。調査は大瀬川古館遺跡A Bの調査と同時に並行して実施された。基準点は、中心杭S T A 420+60で、東西3 m、南北6 mのグリッドを設定し、南北36 m東西33 mの範囲で、畑地の耕作土を除去した。尚、南北中心線はN-9°-Eである。

調査の結果は、耕作土の下が砂礫層で、耳取川の氾濫原と考えられ、遺構、遺物共に発見されなかった。分布調査の際発見した遺物は、耳取川の上流から運ばれてきた可能性もあると考えられるし、又畑地へ客土した可能性もあり、客土に遺物が混入していた事も考え得る。

上台遺跡

遺跡名：上台（略号UD74）

遺跡所在地：神宮郡石鳥谷町八日市字上台

調査期間：昭和49年6月19日～10月3日

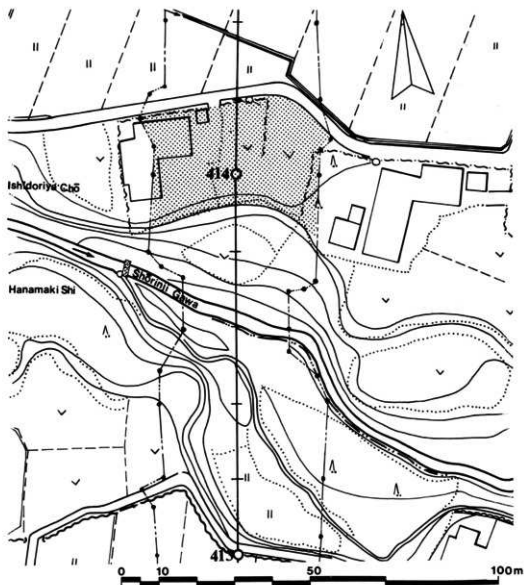
調査対象面積：1,500㎡

発掘調査面積：1,300㎡

I 遺跡の位置と立地

本調査地区は、稗貫郡石鳥谷町八日市字上台に所在している。国鉄東北線石鳥谷駅の南西約4kmに位置し、東流する松林寺川の北岸、花巻段丘面に立地する。県道石鳥谷—花巻温泉線の松林寺川に掛かる境橋より北西へ約350mの地点に在り、南接する松林寺川から南は花巻市平滝である。調査地区の南側は、段丘崖と思われる斜面で、北側・西側・東側共に平坦な水田である。調査地区の現状は畑地と宅地で、南へ緩傾斜する。標高は115~117mである。

調査地区の北約650mには野田遺跡、北約2.7kmには大瀬川古館遺跡がある。



第1図 地形・調査範囲

II 調査の方法と経過

本調査地区は、昭和49年6月19日～20日、8月20日～21日、10月3日と3回に渡って調査され、遺構実測図は、平面図が平板測量による縮尺50分の1で作成された。遺跡の現状は、東側と西側が宅地、中央部が畑地で、全域がかなり削平され、整地されたらしく堆積土層がきわめて少なかったためか、基本層序図は作成されていない。基準点は中心杭414+00。南北中心線はN-8°-Eである。レベル基準線は中心杭414+00の標高116.33mを利用している。

III 発見された遺構と遺物

発見された遺構は、焼土遺構2基、落込み2ヶ所。遺物は、焼土遺構A・B、東側落ち込み、落ち込みIの4ヶ所から、それぞれ若干量が出土した。(遺物一覧表参照)

(1) 焼土遺構A (第2図上)

(遺構の確認) 基準点414より東へ11～12.52m。北へ0.6～2.15mの地点に、焼土を含む暗褐色の落ち込みを確認した。

(重複) なし

(平面形・方向) 北西-南東が1.96m、北東-南西が0.39～0.76mで、北西-南東が長い不整形で、深さは北西側が2～6cm、南東側が8～20cmである。(第2図)

(堆積土) 2層に分かれ、北西側は焼土の堆積で、南東側は暗褐色腐植土で焼土はほとんど含まない。両者は中央やや北西寄で接し、暗褐色土が上層になる。

(近接した遺構) 南東方向に焼土遺構Bがあり、その間は65cmである。

(年代決定資料) 土師器は、長胴甕14点。小型甕4点。内黒杯13点。その他非内黒の杯6点が出土した。長胴甕は口縁部と体上部が横なで、体下半は篋削り篋なで。小型甕と杯類はろくろ成形で、回転糸切りである。(出土遺物一覧表参照)

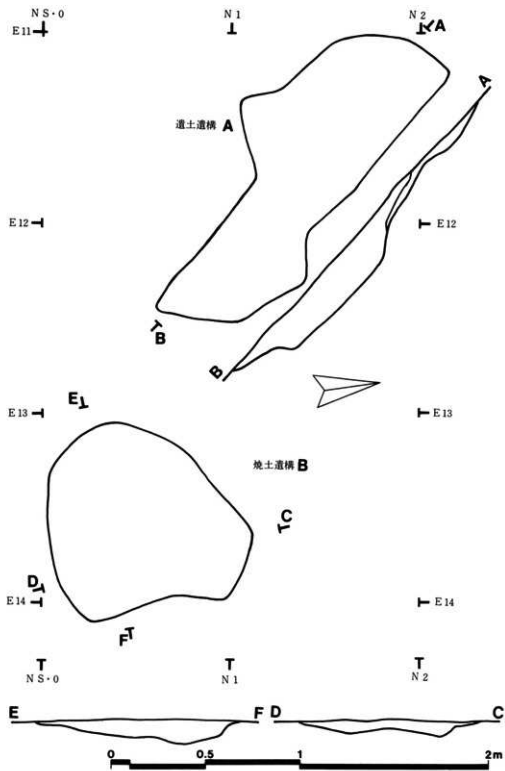
出土遺物

長胴甕(第3図1、図版1-1)、推定口径約20cm。頸部径約17.8cm。口縁部高さ2.5cm。胎土はやや軟質、色調は澄色。焼成はやや良好である。

小型甕(図版1-2・3) いずれもろくろ成形で、小破片のため計測不能である。

内黒杯(第3図2・3、図版1-4・5) 2は、推定口径約15cm。体壁はかなり外傾する。体部と底部は接合しない。内面の磨きは横方向で、若干右方向が下がる。3は、推定口径約19cm。ろくろなでに依る凸凹が著しい。2・3共に胎土はやや軟質、色調はにぶい澄色、焼成はやや良好である。

非内黒杯(第3図4、図版1-6) 推定口径約15cm。胎土は軟質、色調は澄色、焼成は酸化炎焼成で不良である。尚登録番号37は、内面が剥離し、内黒か非内黒が不明の杯で、体下半と底



第2図 遺構図

下面が手持篋削り調整痕が認められるため、内黒杯の可能性がある。

(2) 焼土遺構B (第2図下)

(遺構の確認) 基準点414より東へ13.05~14.10m。北へ0.03~1.12mの地点に、焼土、炭化物の混入した黒色の落ち込みを確認した。

(重複) なし。

(平面形・方向) 東西約1m。南北1.1mの不整形円で、深さは6~13cmの浅い掘り込みで、底面はほぼ平坦で、東側が若干深くなっている。

(近接した遺構) 北西側に焼土遺構Aがあり、その間は約65cmである。

(年代決定資料) 須恵器杯2点が出土した。1点はろくろなで成形無調整、回転糸切りで、他の1点は、体部小破片で前者と同一個体の様に思われるが、接合しない。

出土遺物

須恵器、杯(第3図5、図版1-7) 推定口径約14.8cm。器高5.3cm。底径約6.2cm。胎土やや硬質、色調は灰色。焼成は還元炎焼成で良好である。

(3) 東側落ち込み

実測の記録が無く、位置・規模・平面形等不明である。遺物を取納した袋に記名がある。

出土遺物は、土師器長胴甕4点、小形甕2点、内黒杯2点が出土している。長胴甕No40、41は、焼土遺構A出土の甕No2と、成形、胎土、色調、焼成が類似し、同一個体と思われる。小形甕と内黒杯は、ろくろ成形である。

出土遺物

長胴甕、4点共に体部小破片で、外面は篋削り篋なで、内面は刷毛目痕が認められる。

小型甕(第3図6、図版1-8) 推定口径約13cm。頸部径約11.7cm。胎土軟質、色調は灰褐色~にぶい澄色、焼成は不良である。

内黒杯、2点共に小破片で、実測不能である。ろくろなで成形無調整、回転糸切りである。

(4) 落ち込みI

実測の記録が無く、位置、規模、平面形等不明である。遺物を取納した袋に記名がある。

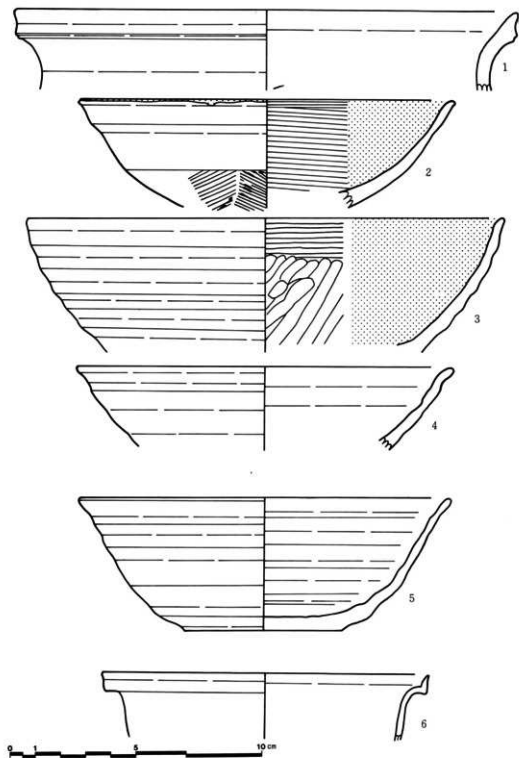
出土遺物は、土師器長胴甕2点、内黒杯2点、小型甕らしい物1点である。長胴甕は内外面共横なで、内黒杯はろくろ成形である。

出土遺物

長胴甕、体部破片2点共に小破片で、実測不能である。

内黒杯、体下半の破片は、ろくろなで成形無調整。体下底の破片は、ろくろなで成形無調整、底下面は回転糸切りである。

登録番号52は、小破片で小型甕体上半部と思われる。



第3圖 出土遺物

上台遺跡出土遺物一覧表

登録番号	器種	残存部位	出土地点	成形技法・調整	備考
1	甕・長胴	口端 $\frac{1}{2}$ 以下	焼土A	口端薄くなる、内外面積まで	740918
2	"	"	"	口端上に強く挽き出される、内外面積まで	第3図1、図版1-1
3・4	"	体	"	外面荒削り、甕などで、内面刷毛目	2と同一個体か
5・6	"	体上	"	内・外面共横まで	各2片
7-13	"	体	"	外面荒削り、甕などで、内面荒まで	"
14	"	体下底	"	底上・下面共荒まで	"
15・16	"	小型 体 $\frac{1}{2}$	"	内外面共ろくろまで	"
17	"	体下底 $\frac{1}{4}$	"	下面回転糸切り	図版1-2
18	"	"	"	"	図版1-3
19	内黒杯	口 $\frac{1}{2}$ 体 $\frac{1}{2}$	"	ろくろなどで成形無調整、内面横・斜磨き	第3図、図版1-4
20	"	口体 $\frac{1}{8}$	"	" 内面斜磨き	"
21	"	口体底 $\frac{1}{2}$	"	体下底手持荒削調整、内面横磨き	第3図2、図版1-5
22	"	口体 $\frac{1}{8}$	"	体下手持荒削調整、内面横磨き	"
23	"	"	"	ろくろなどで成形無調整、内面横磨き	"
24	"	"	"	"	外面剥離多
25	"	口体上	"	ろくろなどで成形	外面大部分剥離
26	"	"	"	"	口縁外面黒色処理
27	"	"	"	"	"
28-30	"	体 $\frac{1}{2}$ 以下	"	"	磨減著しい
31	"	体下底 $\frac{1}{8}$	"	ろくろなどで成形無調整、内面放射状磨き	底下面回転糸切り
32	非内黒杯	口体 $\frac{1}{8}$	"	"	第3図4、図版1-6
33	"	口体上 $\frac{1}{8}$ 以下	"	"	"
34	"	体下	"	"	"
35-36	"	体	"	"	"
37	杯	体下底	"	手持荒削調整、内面剥離不明	"
38-39	非内黒杯	口 $\frac{1}{4}$ 体底 $\frac{2}{3}$	焼土B	ろくろなどで成形無調整、底下面回転糸切り	第3図5、図版1-7
40-43	甕・長胴	体 $\frac{1}{2}$ 以下	東、落込み	外面荒削り、甕などで、内面刷毛目	740703
44	"	小型 口体上 $\frac{1}{2}$ 以下	"	ろくろなどで成形、口端上に強く挽き出される	第3図6、図版1-8
45	"	体下底 $\frac{1}{2}$ 以下	"	底下面回転糸切り	"
46	内黒杯	口体 $\frac{1}{2}$ 以下	"	内面横磨き	"
47	"	体下底 $\frac{1}{2}$ 以下	"	ろくろなどで成形無調整、内面磨減	体下底に黒斑
48	甕・長胴	体 $\frac{1}{2}$ 以下	落込みI	外面荒まで、内面横まで	740702
49	"	体上 $\frac{1}{4}$ 以下	"	外面横まで、内面横まで	"
50	内黒杯	体下 $\frac{1}{4}$	"	ろくろなどで成形無調整、内面横磨き	"
51	"	体下底 $\frac{1}{8}$	"	内外面磨減	"
52	甕 ?	体上 $\frac{1}{4}$ 以下	"	外面横まで(ろくろ?)内面剥離不明	"
53	須恵壺	体上 $\frac{1}{4}$ 以下	東側表採	内外面まで、塚付着	740703

(5) その他

東側表土より、須恵器の壺（一覧表53）体部破片が1点出土した。内外面共に横なで成形で工具により叩きしめられた痕はない。

IV まとめ

調査の結果、2基の焼土遺構が隣接して発見され、埋土から若干の遺物が出土した。又、落ち込みが2ヶ所発見され、埋土から若干の遺物が出土した。

焼土遺構の性格は明確でないが、屋外炉か、野窯かと思われる。

落ち込み2ヶ所についての性格は、人為的なものかどうか不明なため、明確ではない。

出土遺物の中で、変形の土器は、体下半に篋削り篋なでを施した長胴形と、ろくろ成形の小型のものに大別できるが、どちらも口縁部は口端が上に強く挽き出されている。

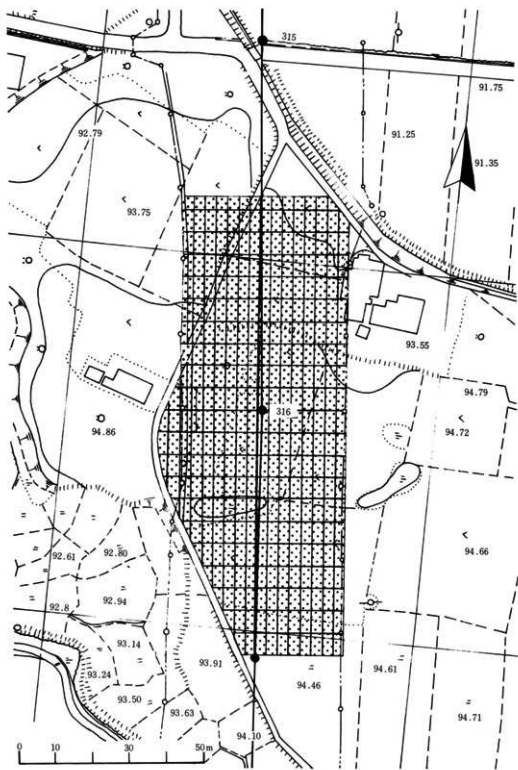
杯形の土器は、内黒処理のものと、内黒処理をしないものに分けられ、内黒処理のものは、体下半と底部に手持篋削り調整のあるものと、無調整で回転糸切りのものに分かれ、内黒処理をしないものは、灰色の還元炎焼成のものと、橙色系の酸化炎焼成のものに分かれる。

焼土遺構Aからは、内黒杯の他に酸化炎焼成の非内黒処理杯が出土し、焼土遺構Bからは、還元炎焼成の杯が出土し、2ヶ所の落ち込みからは、内黒杯だけ出土している。

4遺構の新旧関係は明確ではないが、出土遺物はいずれもろくろ使用の時期であり、平安時代のものと考えられる。

南^{みなみ}万^{まん}丁^{ちやう}目^め遺跡

遺跡名：南万丁目（略号MM73）
遺跡所在地：花巻市中根子字滝沢14他
調査期間：昭和48年9月2日～10月6日
調査対象面積：5,040㎡
発掘調査面積：1,480㎡



第1図 遺跡周辺の地形及びグリッド配置図

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、国鉄東北本線花巻駅の南西1.9km、豊沢川左岸から北約1kmに位置し、水田地帯の中であって、わずかに畑地として利用されてきた段丘周縁の平坦面に立地している。(第1図)

遺跡の周辺には、南300mに中世館跡として周知されている古館遺跡があり、その西に隣接して、和同開珎・蕨手刀・直刀・玉類等を出土した一連の熊堂古墳群が点在している。

当該地は、東北自動車道建設関連遺跡分布調査の際に、同畑地内から3基のマウンド状盛土が認められたことと、少量ではあるが土師器片等の遺物の散布状態、ならびに、立地形及び周辺遺跡との関連から勘案して、遺跡登録し調査の対象とした。

II 検出された遺構と遺物

調査は、5,040㎡を対象に、東北自動車道中心杭(S T A316+00)を基準として3×6mのグリッドを設定し、そのうち1,480㎡を発掘した。

調査の結果、分布調査の際に認められた3基のマウンド状盛土は、いずれも耕作土上に礫・土砂を乱積み状に重ね上げられたものであり、畑耕作の際に土中から取り除いた石を、一定か所に長年にわたって投げ重ねたものであることが判明し、少くとも、古墳ないし塚等の祭祀遺構でないことが確認された。

検出された遺構は、円形周溝1基のみである。これは、検出面で幅1m、深さ約40cmのU字形の溝で、長径8m、短径6.5mの小判形にめぐらされている。この形状から、すでにマウンドを失っている古墳ないし塚の可能性も想定されるので、周溝に囲まれた内部地区に、土壌等の遺構や、盛土の痕跡があるかどうか精査するとともに、遺物の検出につとめたが結果は、遺構遺物の確認にいたらず、また溝埋土にも伴出遺物が皆無だったことから、現段階では、構築時期・性格とも不明な周溝跡といわざるをえない。(第2図)

出土遺物には、土師器・須恵器および陶器の破片がある(図版第2～4図)。これらは、粗掘段階で出土したもので、遺構との関連で検出されたものではない。

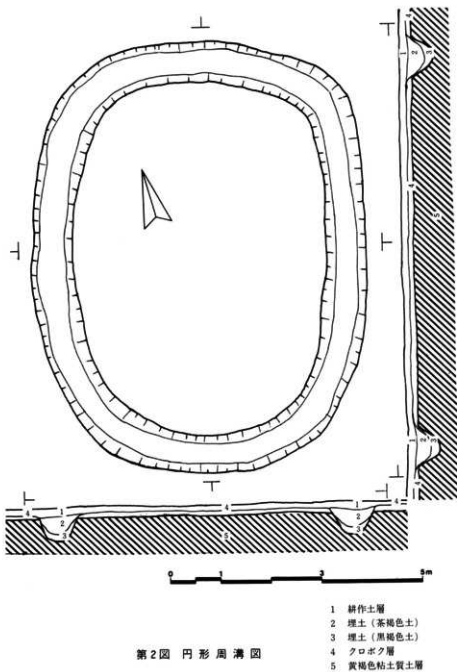
しかし、土師器の中には、比較的まとまって出土したものがあり(図版第2・3図)、長胴の甕片にまじって、2個の小形片口土器が検出されている(図版第3図)。これらは、まず、手づくねとへら状工具によって整形され、器面は指とへらナデによって仕上げられている。これと類似のものに水沢市今泉遺跡出土のものがあり、8世紀前半に比定される遺物群のひとつと考えられている。

III まとめ

検出された遺構が、円形周溝1基のみである。これには、伴出遺物もなく、構築時期・性格

等、現段階では不明である。

しかし、粗掘段階で出土している遺物から、周辺遺跡である「熊堂古墳群」が構築された時期の集落跡や、「古館」築営の時期に関連する遺構が、まさに隣接していることが察知される。



第2図 円形周溝図

ふる だて 古館遺跡

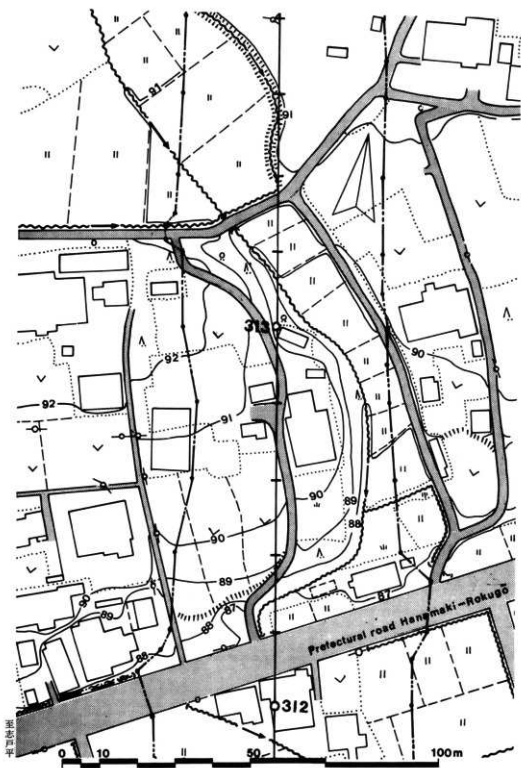
遺跡名：古館（略号FD72）

遺跡所在地：花巻市湯口町大字中根子字古館59他

調査期間：昭和47年10月6日～12月28日

調査対象面積：5,500㎡

発掘調査面積：4,500㎡



第1圖地形圖

I 遺跡の位置と立地

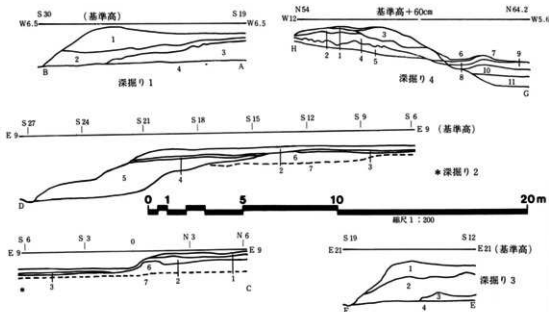
古館遺跡の本調査地区は、花巻市湯口町大字中根子字古館59他にあり、国鉄東北線、花巻駅の南西約2.1kmで、花巻市街地から志戸平、鉛方面に至る県道花巻一六郷線の北側段丘面に立地する。東西約50m、南北約90mが調査地区の中の館跡で、古館遺跡の東端部に当る。現状は南半が畑地、北半が宅地と畑地、東側段丘崖下は水田で、南北に帯状に延びている。標高は88～92mである。東側と南側の段丘崖は比高約2～2.6m、北側で1m弱である。

古館遺跡は、根子氏の居城「中館」^(註1)といわれ、東西250m、南北130mが、遺跡として指定^(註2)されている。尚、館に関する記録として、天文・天正の頃のもの^(註1)が伝えられているという。

本調査地区の北約300mには南万丁目遺跡、西約800mには、古館遺跡の西側に隣接して、和銅開帳や蕨手刀・直刀、玉類等を出土した熊堂古墳群がある。

II 調査の経過

- ・調査は、昭和47年10月6日からの掘り記録があり、同年12月28日に終了している。
- ・グリッド設定の基準点は、中心杭312+60である。南北線は、N-8°30'-Wである。
- ・グリッド名は、基準点より120m以北をA区。60m以北をB区、中心杭313+20～312+60をC区、基準点以南をD区とした。各地区は更に3m毎に細分し、a～tの名称を付した。南北中心線より東西へ3m毎に細分し、西へ03・06→21・24、東へ50・53→71・74の名称を付した。



第2図 土層断面図

- ・粗掘りは、南北6m、東西3mを単位とし、千鳥に実施し、グリットの畦で表土の堆積状況を観察・記録した。遺構が検出された後に、その周囲の表土を全面除去した。
- ・レベル測定の基準標高は不明であったため、中心杭312+40の杭高を基準にした。
- ・調査範囲は、遺跡の範囲確認と遺構遺物の確認のため、中心杭314+00の北10mまでである。

III 層序と土質

調査地は、館の東端と思われたので範囲確認を兼ね4本の深掘を実施した。第3図に示した1～4で、土層断面は第2図の通りである。宅地・畑地のため攪乱が著しい。

深掘り1 (A～B) 1層、最近の盛土層、礫を多く含む。2層、黒褐色土、粘性なく崩れやすい。礫はほとんど含まない。1層と2層の間に農業用ビニールがかなり多く入る。3層、砂礫層、北側ほど砂質土が多い。柱穴群の検出面で、旧表土と思われる。

深掘り2 (C～D) 1層 暗褐色腐植土。2層 黒色腐植土。3層 黒褐色腐植土。4層 砂礫層 (攪乱)。5層 黒色腐植土。6層 黄褐色砂礫層。7層 黄褐色砂礫層。

深掘り3 (E～F) 1層 黄褐色砂礫層、攪乱著しい。2層 黒色腐植土、礫多く含む。3層 黄白色砂礫層。

深掘り4 (G～H) 1層 黒色腐植土。2層 礫層、径5～10cmの礫、腐植土を若干含む。3層 礫の集積層。4層 黒褐色土層。5層 黄褐色砂礫層。6層 用水路断面。7層 暗褐色腐植土層。8層 砂礫層。9層 蒼青色粘土層。10層 暗褐色粘土層。11層 黒褐色粘土層。

IV 発見された遺構と遺物

A・B地区からは、遺構遺物共に発見されなかった。B区からは、焼土遺構2基。半地下式建物跡4棟が発見され、各遺構共遺物を伴出した。D区からは柱穴群が発見された。

1 焼土遺構

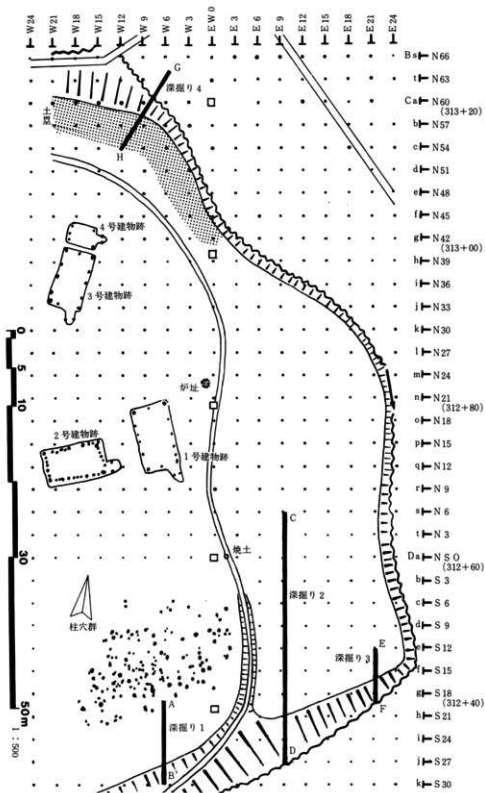
(1) Cm03焼土遺構 (第3図、図版2—上段左右)

炉址と思われる焼土遺構で、6個の礫が周囲に並ぶ。実測の記録がなく、規模や焼土の堆積状況は不明である。

(年代決定資料) 頸部有段体壁に丸みのある甕1点。有段丸底の杯2点が、焼土中より出土している。3点共ろくろ使用前の土師器と思われる。

出土遺物

- ・甕203 (4図3、図版4—上段中・5—3)。遺物集計表、甕形土器1、Na6。有段長胴。
- ・杯67 (図版6—24)。遺物集計表、杯形土器1、Na6。内黒、有段、丸底。
- ・杯66 (図版6—27)。遺物集計表、杯形土器1、Na18。非内黒、沈線、丸底。



第3図 グリッド・遺構配置図

(2) D a 50焼土遺構 (第3図、図版2一中下段)

炉灶と思われる焼土遺構で、焼土を中心に、かなり広い範囲に炭化材が検出された。実測の記録がなく、規模や焼土の堆積状況は不明であるが、D a 50-C t 50地区に広がっている。

(年代決定資料) 頸部有段、内外面刷毛目調整の甕1点。小型の甕1点の他に、甕の体部破片7点。有段丸底の杯5点とろくろ使用の杯破片1点が出土した。甕杯共にろくろ使用以前と思われるものが大部分である。

出土遺物

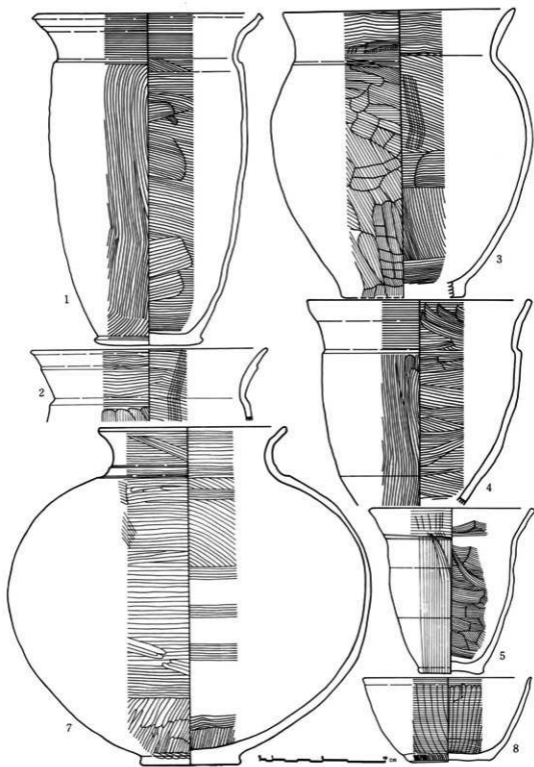
- ・甕56・195 (第4図4、図版5-4)、遺物集計表、甕形土器1、No.5。有段、長胴。
- ・甕65他 (第4図5、図版5-5)、遺物集計表、甕形土器1、No.11。小型、頸部沈線長胴。
- ・甕51、遺物集計表、甕形土器2、No.1。長胴、篋など調整。・甕47、遺物集計表、甕形土器3、No.3。刷毛目調整。・甕52、遺物集計表、甕形土器3、No.4。頸部無段。・甕55、遺物集計表3、No.5。刷毛目調整。・甕58、遺物集計表、甕形土器3、No.6。頸部無段、篋など調整。・甕48、遺物集計表3、No.28。長胴、刷毛目調整。・甕59、遺物集計表、甕形土器3、No.29、長胴、刷毛目調整。
- ・板46、遺物集計表、杯形土器1、No.3。有段、丸底。・杯54、遺物集計表、杯形土器1、No.4。有段、丸底。・杯60、遺物集計表、杯形土器1、No.5。有段。・杯169 (第5図10、図版5-10)。遺物集計表、杯形土器1、No.13、沈線、丸底。以上4点は内黒処理。・杯61・124 (図版7-32)。遺物集計表、杯形土器、No.17、非内黒、有段丸底。杯64、遺物集計表、杯形土器2、No.29。ろくろで成形、無調整、非内黒。

以上が焼土内から出土した遺物であるが、同じグリットの表土から、甕2点、62、43・117、遺物集計表、甕形土器1、No.16・No.39。杯1点、123、遺物集計表、杯形土器1、No.19、が出土している。

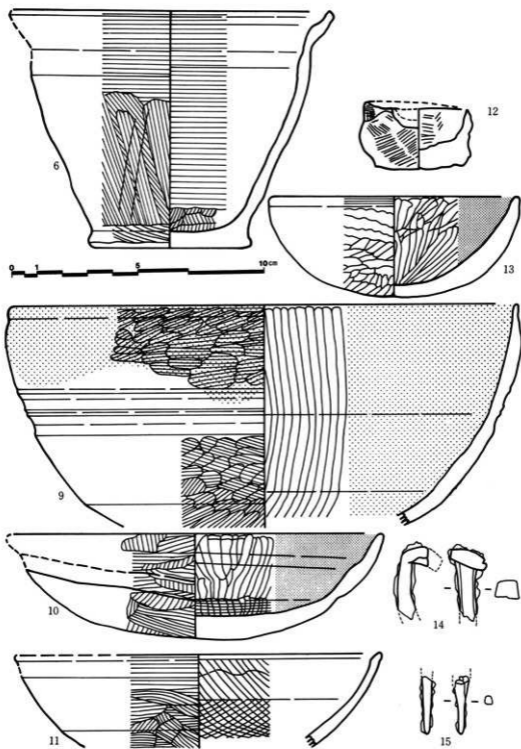
2 表土等より発見した遺物

本調査地区の、表土より発見した遺物は、C・D区が主で、用水路からも若干発見された。大部分は、C m03焼土遺構とD a 50焼土遺構から発見された遺物と共に、次の遺物集計表にまとめたが、用水路から発見した縄文土器片(時期不明)7点と、土師器3点(器形不明)、須恵器1片と、陶器2点は除いた。土師器3点中1点は、図版6-19。陶器2点中1点は、図版7-40である。

遺物集計表中、甕形土器1と杯形土器1は、ろくろ使用以前と思われるもの。甕形土器2と杯形土器2は、ろくろ使用の時期と思われる。甕形土器3は、小破片か、磨減著しいため、ろくろ使用以前のものか、ろくろ使用の時期のものか不明である。



第4図 出土遺物 I



第5圖 出土遺物 II

3 柱穴群 (第3図、第6図、図版3一下段左右)

D区西側に集中し、南縁に平行しているようである。南北約14m。東西約22mの範囲で検出された。掘立柱建物跡と思われるが、重複や切り合いのものもあり、建て替えも考え得る。

建物の想定は、かなり困難で、3棟+αの考え方があったが、明確ではなく断定は出来ない。建物に伴う遺物としては、永楽通宝1枚(第12図18、図版8-18)が、柱穴群中から出土しており、館に伴う建物跡かと思われるが、明確ではない。

4 半地下式建物跡

(1) 1号建物跡 (第7図、図版3一上段左)

(遺構の確認) 基準点から西へ3.86~11.03m。北へ9.86~20.54mの地点、COP09地区とその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色砂礫層である。

(平面形・規模・方向) 長方形。東西5.30m×南北8.70m。出入口を含む南北総長11m。壁高は33~40cmである。出入口のある長軸方向は、S-19°30'-Eで、ほぼ南向きになる。

(堆積土) 1層、黒褐色腐植土、砂を含む。2層、黒褐色腐植土、礫を含む。3層、黒色腐植土、粘性あり礫を含まない。

(柱穴) 出入口左右に2基、各壁下に計15基あり、4・12・17以外が主柱穴と思われる。

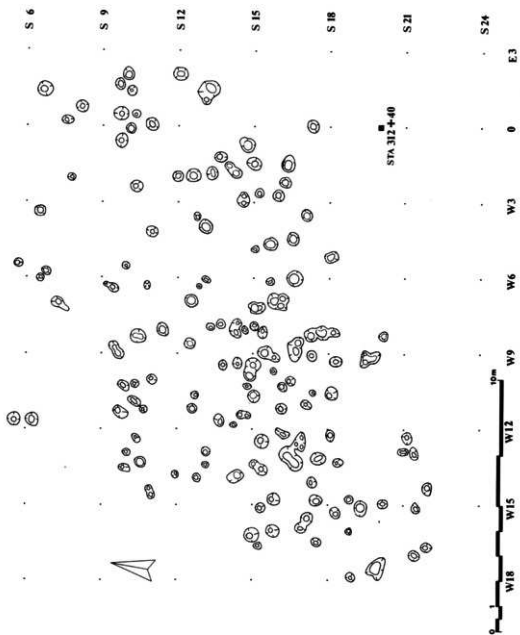
項目	P.No		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17																
	出口	入口	南東隅	東壁下	東壁下	東壁下	東壁下	北東隅	北壁下	北西隅	西壁下	西壁下	西壁下	西壁下	南西隅	南壁下	南壁下		
上場	27×25	28×20	40×56	36×21	28×23	24×24	18×23	59×59	13×16	52×56	27×27	17×16	33×37	37×43	52×56	30×24	24×26		
下場	13×12	7×7	17×19	11×6	23×10	15×15	10×13	16×17	7×6	17×13	15×14	7×4	14×14	17×15	20×19	19×14	14×13		
床面からの深さ	41	41	48	11	17	45	32	70	15	82	35	6	28	55	68	28	27		
埋土	黒褐色高礫土	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ		
上場形状	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形		
下場形状	円形	円形	円形	楕円形	半円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形		
備考	上場へずれる	上場南へずれる	上場西へずれる	上場西へずれる	上場南へずれる	上場南へずれる	上場西へずれる	上場南へずれる	上場南へずれる	上場東へずれる	上場南へずれる	上場東へずれる	上場東へずれる	上場北東へずれる	上場北東へずれる	上場南東へずれる	上場南東へずれる	ずれない	

径は東西×南北 単位 cm

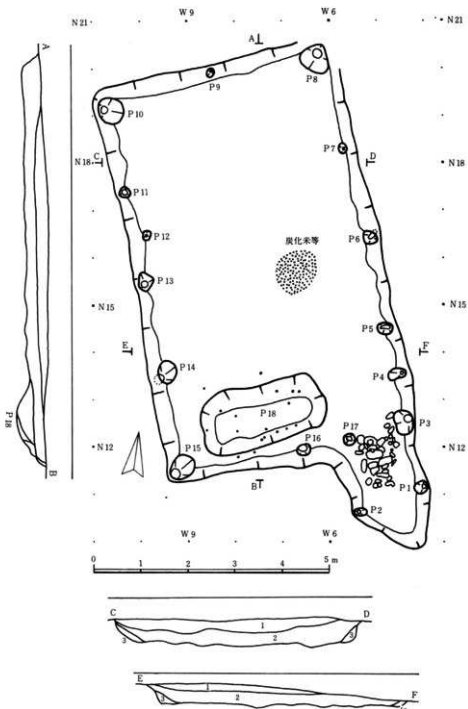
上記の表の通り、上場がかなりずれたものが多く、倒れたものではないかと思われる。柱穴間の距離は、下場の中心から測定した。(第12図)。

(施設)・出入口、南壁東端にあり、南北2.2m。東西1.8m。南端が細くなる。地盤に礫が敷かれ、固く締っている。・ピット、南壁下にあり、東西2.65×南北1.34m、深さ20~34cm。埋土は、1層(第7図4層)灰黄色砂質土、古銭包含。2層(第7図5層)暗灰黄色砂質土。3層(第7図6層)黒色腐植土。・炉・かまど、焼土の集積は確認されなかった。

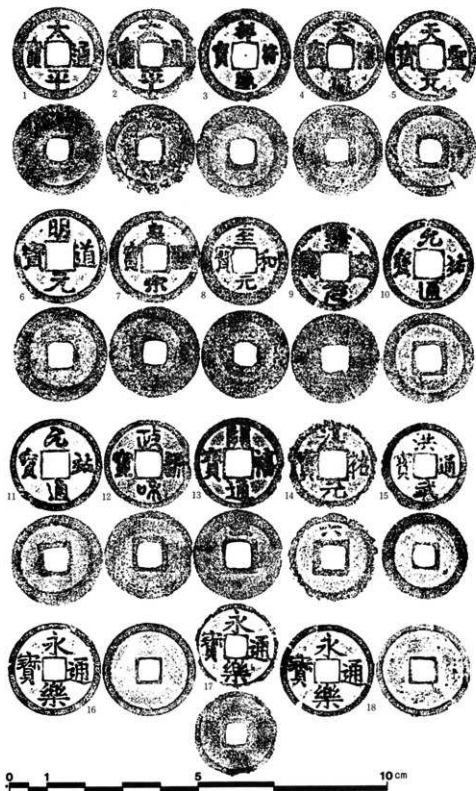
(年代決定資料) 古銭が17枚ピット18内とその周辺から出土した。宋銭と明銭である。



第6図 掘立柱建物跡



第7图 1号建物跡



第8圖 出土古錢

古館遺跡出土 古銭計測表 単位cm・g

No	実測 番号	図版 番号	出土地点	銭文	配字	背文	直径	輪内径	内 郭 径	孔 径	孔 厚	重量	備 考	
1	8-1	8-1	1号建物跡	太平通宝	対読		2.45	1.90	0.75	0.70	0.60	0.60	2.75	背の輪は左側が軋と同じ高さ
2	8-2	8-2	"	"	"		2.40	1.90	0.80	0.80	0.60	0.60	2.48	左下・右下外縁破損
3	8-3	8-3	"	祥符通宝	順読		2.50	1.90	0.80	0.80	0.65	0.65	2.60	背の輪・郭が下へずれる
4	8-4	8-4	"	天啓通宝	"		2.40	1.95	0.80	0.80	0.65	0.65	2.82	
5	8-5	8-5	"	天聖元宝	"		2.45	2.00	0.90	0.80	0.65	0.60	3.12	
6	8-6	8-6	"	明道元宝	"		2.55	2.10	0.90	0.85	0.75	0.70	3.78	
7	8-7	8-7	"	皇宋通宝	対読		2.45	2.00	0.85	0.80	0.65	0.65	3.06	背の輪・郭が左へずれる
8	8-8	8-8	"	至和元宝	順読		2.35	1.80	0.80	0.70	0.65	0.60	2.76	背の輪・郭ほとんど無し
9	8-9	8-9	"	萬寧元宝	"		2.40	2.00	0.90	0.90	0.70	0.70	1.88	
10	8-10	8-10	"	元祐通宝	"		2.45	2.05	0.85	0.85	0.70	0.70	3.02	背の輪・郭右へずれる
11	8-11	8-11	"	"	"		2.50	2.05	0.85	0.90	0.65	0.65	2.68	背の輪・郭左上へずれる
12	8-12	8-12	"	政和通宝	対読		2.40	2.05	0.85	0.80	0.65	0.65	3.10	銭文「和」は転位「」
13	8-13	8-13	"	開禧通宝	順読	二	2.45	2.10	0.90	0.85	0.70	0.70	2.41	背の輪・郭右下へずれる
14	8-14	8-14	"	淳祐通宝	"	六	約 2.50	2.00	0.90	0.85	0.65	0.70	2.38	外縁欠損
15	8-15	8-15	"	洪武通宝	対読		2.30	1.90	0.70	0.65	0.60	0.55	2.58	背の輪・郭右へずれる
16	8-16	8-16	"	永樂通宝	"		2.50	2.10	0.70	0.70	0.55	0.55	2.58	
17	8-17	8-17	"	"	"		2.30	2.00	0.75	0.70	0.60	0.55	1.92	
18	8-18	8-18	D a 12北側	"	"		2.50	2.15	0.70	0.70	0.60	0.60	1.56	

出土遺物

・古銭（第8図1～17、図版8-1～17）北宋銭12枚、南宋銭2枚、明銭3枚である。

・炭化穀物粒（図版9-上4段）

米、小麦、小豆、葛の実の4種類で、それぞれ虫喰穴や火傷をした物がみられ、火気を被ったと思われる。穀物計測表参照。

(2) 2号建物跡（第9図、図版3-中段）

（遺構の確認）基準点から西へ12.33～22.60m、北へ9.80～15.6mの地点。C P21地区とその周囲に、淡褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色砂礫層である。

（平面形・規模・方向）長方形。東西8.34×南北4.85m。出入口を含む東西総長10.0m。壁高は20～34cmである。出入口のある長軸方向は、N-71°30'-Eで、東北東向きになる。

(堆積土) 1層、淡褐色腐植土、粘性あり、礫を含む。遺構の検出段階で、周壁に粘土を貼り付けていると記されているが、セクション図には記録がない。

(柱穴) 出入口の左右に2基、各壁下に39基あり、主柱穴は9、13、15、20、26、30、34、37と思われる。(第9図、第12図、下記の表参照)。

P. No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14の1	14の2	14の3	15	16	17	18
位	出入口	出入口	東壁下	東壁下	東壁下	東壁下	東壁下	東壁下	北東隅	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下
上場径	20×18	25×20	39×34	27×35	23×28	25×43	64×51	41×41	25×26	51×42	25×26	4脚×49	25×34	20×20	23×21	40×42	28×26	31×32	20×20	
下場径	12×11	15×14	16×14	17×20	8×8	12×12	15×20	28×27	30×32	15×14	30×25	9×10	24×24	13×10	15×15	17×15	26×30	12×10	20×17	13×10
床面からの高さ	33	60	28	22	26	40	23	38	80	26	27	24	64	23	16	20	57	26	26	28
埋土	東端部 東壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下
上場	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄
下場	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄

P. No	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	31	33	34	35	36	37	
位	北壁下	北西隅	西壁下	西壁下	西壁下	西壁下	南西隅	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下	南壁下
上場径	12×18	44×42	30×32	31×25	23×21	27×28	23×21	41×36	19×19	22×20	28×15	46×44	16×25	21×22	20×20	41×40	29×25	36×33	11×51	
下場径	13×12	28×26	15×22	18×15	9×10	14×14	8×7	22×21	9×8	10×9	14×8	26×25	8×16	12×12	20×21	18×15	18×16	34×32		
床面からの高さ	28	69	19	24	14	21	20	71	20	20	20	60	22	41	31	71	28	28	73	
埋土	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	北壁下	
上場	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	
下場	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	形鉄	

図は東西×南北 単位cm

(施設) ●出入口、東壁南端にあり、東西2.3m。南北1.63m。東端は丸い。地盤に礫が敷かれ固く締っている。●ピット、床面に大小7基(P.38~P.44)があるが、性格不明である。

●炉・かまど、焼土の集積が4個所確認されたが、床面から浮いており明確ではない。●周溝、各壁下の柱穴P.3~P.37の間に巾10~20cm、深さ5~20cmの規模で確認された。

(年代決定資料) 年代を明示する資料は見えられなかった。

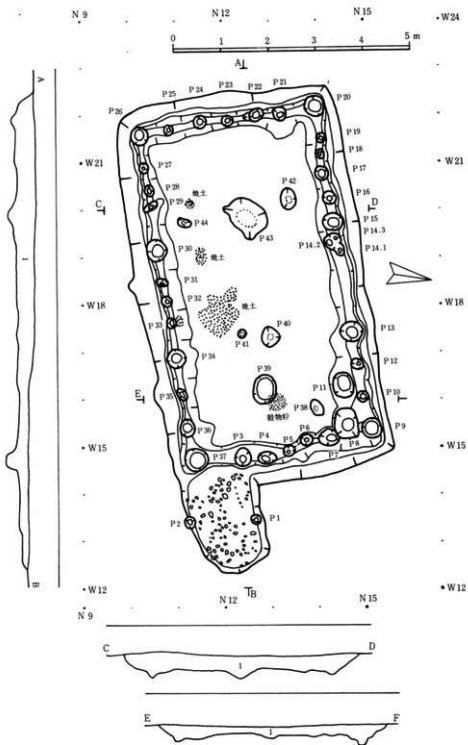
出土遺物

●炭化穀物粒(図版9-5段以下)米、小豆、葛の実の3種類のほか、炭化しない植物種子が数十粒出土した。帯化穀物粒は火腫れ、虫喰痕のあるものがみられ、葛の実の中は海綿状である。

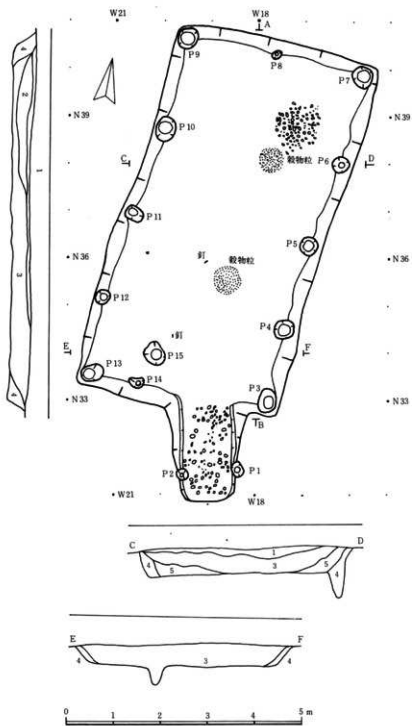
●植物種子は表皮のみで、イヌガラシの実と鑑定された。

(3) 3号建物跡 (第10図、図版3-上段右-下方)

(遺構の確認) 基準点から西へ15.46~21.78m。北へ30.89~40.9mの地点、Ch i 12地区とその周囲に、淡褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色砂礫層である。



第9圖 2号建物跡



第10圖 3号建物跡

(平面形・規模・方向) 長方形。東西4.3m×南北8.15m。出入口を含む総長9.87m。壁高は34~40cm。出入口にある長軸方向は、S-7°30'-Wで、ほぼ南向きになる。

(地積土) 1層、淡褐色腐焼土、粘性少ない。2層、砂礫層。3層、暗褐色腐植土、粘性あり砂礫を含む。4層、黒色腐植土。5層、褐色砂礫層。

(柱穴) 出入口左右に2基。各壁下に14基あるが、北壁下の8と南壁下の14は、径が小さく浅い。15は、柱穴状であるが、明確ではない。

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
位置	出入口東	出入口西	南東隅	東壁下	東壁下	東北隅	北壁下	北西隅	西壁下	西壁下	西壁下	南西隅	南壁下	
上場径	28×29	23×24	36×45	36×39	37×39	33×34	40×44	18×17	44×45	46×55	34×31	30×32	42×39	27×23
下場径	15×15	14×14	24×27	25×27	22×25	15×15	26×28	8×10	27×30	30×29	21×21	18×18	29×26	15×16
床面からの深さ	26	29	37	40	36	42	46	10	46	42	28	29	39	21
埋土	淡色腐植土	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ
上場形状	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形
下場形状	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形

図8 東西×南北 単位cm

(施設) ●出入口、南壁東寄りにあり、南北1.8m、東西1.0~1.73m。南端はわずかに丸い。両側に浅い溝が掘られる。●ピット、15が南壁近くにあり柱穴状であるが、性格不明である。●炉・かまど、焼土の集積は確認されなかった。●礫の集積部、北東側床面に径約1.0mの範囲で、敷石状に集積するが、性格不明である。

(年代決定資料) 年代を明示する資料は発見されなかった。

出土遺物

- 炭化穀物粒 (図版10-上3段)、米、小豆、葛の実で3種類、火脹れのものがある。
- 鉄釘 (第5図14・15、図版8-19・20) 床面中央南寄りから2本礫に付着して出土した。

(4) 4号建物跡 (第11図、図版3-上段右-上方)

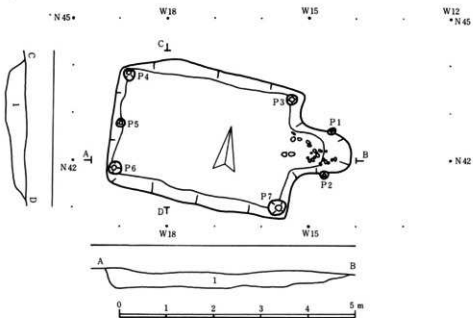
(遺構の確認) 基準点から西へ14.10~19.28m、北へ40.77~44.11mの地点、C f 18地区とその周囲に、暗褐色の落ち込みを確認した。

遺構確認面は黄褐色砂礫層である。

(平面形・規模・方向) 長方形。東西3.93m×南北2.87m。出入口を含む総長5.14m。壁高は20~24cm。出入口のある長軸方向は、E-0°30'-Sで、ほぼ東向きになる。

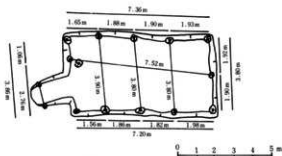
項目	1	2	3	4	5	6	7
位置	出入口北	出入口南	北南隅	北西隅	西壁下	南西隅	南東隅
上場径	14×11	16×14	20×21	23×25	17×17	28×26	35×34
下場径	8×6	8×8	13×13	9×9	7×6	14×14	17×15
床面からの深さ	23	30	32	40	18	29	36
埋土	暗褐色腐植土	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ	1に同じ
上場形状	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
下場形状	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形

図8 東西×南北 単位cm



第11图 4号建物跡

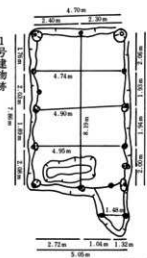
3号建物跡



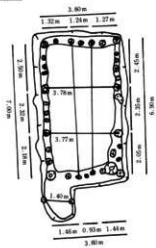
4号建物跡



1号建物跡



2号建物跡



第12图 各建物跡柱穴間長さ(下場中心点基準)

(堆積土) 1層、暗褐色腐植土、礫を多く

含む。

(柱穴) 出入口左右に2基、各コーナー下と、西壁下に1基ある。

(施設) ●出入口、東壁は、中央にあり、東西1.22m、南北0.6~1.2m。東端は丸い。他の建物跡同様に礫を敷き、地盤はかなり固く締っている。●ピット、無し。●炉・かまど、無し。

(年代決定資料) 年代を明示する資料は発見されなかった。

出土遺物●炭化穀物粒(図版10-4段目)、米3粒と葛の実3粒の2種類である。

●植物種子(図版10-5段目以下)7種類が確認された。いずれも炭化せず、発芽したものが1種類あった。遺構実測図に記録はないが、床面上に小範囲で集積していた。

ミソソバ(図版10-上から5段目、植物種子集計表No.7・8)+数粒。

ミミナグサ(図版10-上から6段目、植物種子集計表No.15・16)数粒。

スズメノヒエ(図版10-上から7段目、植物種子集計表No.9・10)数十粒。

スイバ(図版10-上から8段目左、植物種子集計表No.18)数十粒。

メヒシバ(図版10-上から9段目左、植物種子集計表No.17)数粒。

スズメノカタビラ(図版10-上から9段目中・右、植物種子集計表No.11・12)数十粒。

タガラシ(図版10-最下段、植物種子集計表No.13・14)数粒。

以上7種類の植物種子は、2号建物跡床面から出土した植物種子イヌガラシと共に、鑑定に依ると、⁽¹⁴⁾「この8種類は、クロナガアリが土中に種子貯蔵したものと認められる」。この事から、4号建物跡とは、無関係のものであることが判明した。

5 土塁 (第2図-深掘り4、第3図、図版1-下段)

(位置) 北側~北東側の段丘縁部にあり、中心杭313+00の地点まで残存し、東側段丘縁部と南側段丘縁部には残存しない。残存部は西方路線外に続いている。

(規模) 擾乱により明確ではないが、巾約4m。高さ約1m。北東側の水路底面から高さは約1.5mであるが、かなり崩壊した現状のものである。

(堆積土) 1層: 黒色土、2層を薄く覆っており、2層が露出している所もある。2層: 直径10cm前後の礫集積、第2図H-Gの3層に当り、土塁主体部と思われる。3層: 黒褐色腐植土、第2図H-Gの4層に当り、土塁の基底と思われる。

(現状) 土塁の上に針葉樹等の樹林と雑草が生えており、崩壊されたと思われる部分が、かなり認められる。北側段丘縁部の土塁は、西方に続いているが、宅地と道路の境界線に利用され、樹木が植えられ垣根になっている。

炭化穀物粒・植物種子、計測表

●炭化米：1号建物跡床面からは、かなりの量の出土があり、その中から59粒を無差別に抽出し、計測を実施した。

2号・3号・4号の各建物跡からの出土量は、1号建物跡からの出土量より少ないため計測可能なものを全部を抽出し、計測した。

炭化米の分類基準は、「考古学選書、日本の古代米」、佐藤敏也著、昭和49年、雄山閣に依った。

●炭化小麦：1号建物跡から1粒出土した。

●炭化小豆粒：1号・2号・3号の各建物跡床面から出土し、計測可能な物全部を抽出し、計測した。

●炭化葛の実粒：1号・2号・3号・4号の各建物跡床面から出土し、計測可能な物全部を抽出し計測した。

●以上4種の炭化穀物粒は、いずれも同一範囲内から混合された状態で出土した。

●他の植物種子は少量で、その中から2点宛抽出し、計測した。

炭化米 計測表

I-A(長さ0.37~0.52cm、巾0.28~0.37cm)

登録No	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	唇 角	備考
17	0.52	0.28	0.20	1.86	粒、芒残る
21	0.51	0.30	0.23	1.70	"
22	0.49	0.30	0.21	1.63	虫喰痕
23	0.48	0.35	0.26	1.37	大眼丸
24	0.45	0.32	0.21	1.41	" 磨残る
26	0.47	0.31	0.25	1.52	虫喰痕
30	0.50	0.31	0.21	1.61	"
31	0.51	0.31	0.20	1.65	粒1部残る、虫喰痕
32	0.45	0.32	0.23	1.41	大眼丸
33	0.43	0.31	0.23	1.39	"
34	0.48	0.35	0.20	1.37	" 虫喰痕
35	0.48	0.35	0.20	1.37	"
36	0.49	0.31	0.23	1.58	" 虫喰痕
38	0.47	0.34	0.24	1.38	" 芒残る

登録No	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	唇 角	備考
39	0.49	0.35	0.23	1.40	大眼丸
40	0.48	0.32	0.22	1.50	"
以上1号建物跡					
7	0.49	0.28	0.20	1.75	粒残る、虫喰痕
12	0.46	0.28	0.19	1.64	"
22	0.52	0.30	0.22	1.73	粒残る、虫喰痕
23	0.51	0.28	0.19	1.82	"
24	0.51	0.35	0.23	1.46	"
25	0.50	0.30	0.22	1.67	"
27	0.51	0.30	0.21	1.70	虫喰痕
28	0.49	0.31	0.24	1.58	大眼丸
29	0.52	0.31	0.24	1.68	"
31	0.51	0.30	0.21	1.70	虫喰痕、粒残る
32	0.50	0.32	0.23	1.56	"
36	0.49	0.29	0.21	1.69	"
37	0.47	0.28	0.25	1.68	"
38	0.49	0.29	0.19	1.69	粒残る
39	0.50	0.30	0.19	1.67	"
40	0.48	0.28	0.20	1.71	"
41	0.51	0.30	0.21	1.70	"
43	0.51	0.29	0.22	1.76	"
44	0.51	0.30	0.21	1.70	粒残る
45	0.48	0.32	0.23	1.50	"
46	0.47	0.31	0.19	1.52	虫喰痕
47	0.46	0.31	0.21	1.48	"
48	0.46	0.28	0.21	1.64	"
49	0.48	0.28	0.20	1.71	"
50	0.48	0.28	0.24	1.71	"
51	0.48	0.31	0.22	1.55	"
52	0.47	0.30	0.22	1.75	粒残る
53	0.48	0.28	0.22	1.71	"
54	0.50	0.28	0.24	1.79	"
55	0.47	0.29	0.19	1.62	"
56	0.49	0.28	0.20	1.75	"
57	0.48	0.30	0.21	1.60	虫喰痕
59	0.47	0.28	0.21	1.68	粒残る
60	0.47	0.30	0.20	1.57	"
61	0.46	0.30	0.22	1.53	"
62	0.47	0.28	0.22	1.68	大眼丸
63	0.47	0.28	0.20	1.48	"
64	0.47	0.28	0.20	1.68	"
65	0.47	0.28	0.20	1.68	"
66	0.47	0.31	0.22	1.52	大眼丸、虫喰痕
70	0.45	0.30	0.25	1.50	"
71	0.45	0.30	0.21	1.50	"
73	0.45	0.28	0.22	1.41	"
75	0.49	0.28	0.19	1.75	虫喰痕
79	0.44	0.30	0.27	1.47	"
83	0.45	0.26	0.19	1.73	"
85	0.42	0.29	0.22	1.45	大眼丸
86	0.39	0.29	0.19	1.34	"
以上2号建物跡					
6	0.52	0.28	0.22	1.86	粒残る
7	0.50	0.29	0.18	1.72	粒残る
11	0.49	0.30	0.21	1.75	一粒残る、1部剥落
13	0.49	0.30	0.22	1.63	大眼丸、虫喰痕
14	0.46	0.28	0.21	1.64	1部剥落
15	0.49	0.30	0.19	1.63	大眼丸
16	0.44	0.32	0.22	1.37	粒残る
17	0.50	0.30	0.22	1.67	粒、芒残る
18	0.50	0.29	0.22	1.72	粒残る、虫喰痕
19	0.49	0.28	0.21	1.75	"
20	0.45	0.29	0.20	1.55	大眼丸
21	0.51	0.28	0.20	1.82	"
22	0.46	0.30	0.25	1.53	" 粒残る
25	0.51	0.28	0.23	1.82	"
26	0.47	0.29	0.25	1.62	"
28	0.50	0.28	0.22	1.79	粒残る
31	0.45	0.28	0.16	1.61	"
以上3号建物跡					

I-B類(長さ0.37~0.52cm、巾0.21~0.27cm)

登録No	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	唇 角	備考
1	0.52	0.25	0.17	2.08	粒残る、虫喰痕
13	0.51	0.25	0.18	2.00	磨残る、虫喰痕
51	0.40	0.23	0.13	1.74	"
53	0.37	0.25	0.17	1.48	虫喰痕
54	0.38	0.25	0.15	1.52	"
以上1号建物跡					

I-B類 (前頁続き)

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
55	0.39	0.24	0.16	1.63	大振れ
57	0.37	0.23	0.16	1.48	"
58	0.40	0.25	0.18	1.60	" 芒残る
59	0.38	0.22	0.14	1.72	"
60	0.40	0.25	0.16	1.60	"
以上1号建作物群					
2	0.52	0.24	0.22	2.17	虫喰痕
4	0.52	0.22	0.20	2.36	"
5	0.52	0.27	0.21	1.93	" 糠残る
6	0.51	0.25	0.19	2.04	"
7	0.50	0.24	0.20	2.08	" 糠残る、虫喰痕
9	0.47	0.27	0.21	1.74	"
10	0.48	0.26	0.19	1.85	" 糠残る
11	0.43	0.26	0.21	1.65	"
12	0.48	0.26	0.20	1.85	" 虫喰痕
13	(0.47)	0.24	0.19	1.96	" 1部割落
14	0.40	0.25	0.18	1.60	" 芒残る
15	0.46	0.27	0.19	1.70	"
16	0.45	0.24	0.16	1.88	" 虫喰痕
17	0.42	0.22	0.16	1.91	"
18	0.42	0.24	0.19	1.75	" 大振れ
19	0.39	0.24	0.15	1.63	"
20	0.42	0.24	0.20	1.75	" 虫喰痕
26	0.49	0.23	0.23	2.13	" 糠残る
34	0.50	0.27	0.22	1.85	"
42	0.47	0.27	0.20	1.74	"
58	0.47	0.27	0.17	1.74	"
67	0.48	0.26	0.18	1.85	"
68	0.47	0.27	0.19	1.74	" 虫喰痕
69	0.47	0.23	0.19	2.04	"
72	0.44	0.27	0.19	1.63	" 糠残る
74	0.47	0.27	0.19	1.74	"
76	(0.43)	0.26	0.19	1.91	" 1部割落
77	0.46	0.27	0.18	1.70	"
78	0.44	0.25	0.18	1.76	" 虫喰痕
80	0.43	0.27	0.21	1.59	"
81	0.42	0.25	0.22	1.68	"
82	0.45	0.26	0.19	1.73	"
84	0.44	0.26	0.20	1.67	"
87	0.42	0.25	0.18	1.68	"
88	0.38	0.25	0.17	1.52	"
89	0.44	0.26	0.22	1.69	" 虫喰痕、糠残る
91	0.37	0.23	0.19	1.61	" 大振れ
92	0.33	0.21	0.15	1.57	" 以上2号建作物群
1	0.52	0.27	0.19	1.93	"
3	0.51	(0.25)	0.23	1.91	" 糠残る、1部割落
4	0.51	(0.27)	0.21	1.91	"
5	0.48	0.26	0.21	1.85	" 芒残る
8	0.47	0.22	0.20	2.14	"
9	0.46	0.25	0.24	1.84	" 大振れ
10	0.45	0.25	0.18	1.80	" 亀裂
12	0.48	0.24	0.20	2.00	" 糠残る、虫喰痕
23	0.45	0.27	0.30	1.67	" 大振れ
24	0.45	0.25	0.18	1.80	"
27	0.45	0.26	0.16	1.73	"
29	0.49	0.27	0.25	1.81	" 糠残る、大振れ
30	0.45	0.25	0.22	1.80	"
32	0.42	0.23	0.19	1.83	" 糠残る
以上3号建作物群					
1	0.46	0.23	0.19	2.00	" 虫喰痕
2	0.44	0.25	0.22	1.76	" 大振れ
3	0.48	0.27	0.20	1.78	"
以上4号建作物群					
I-C類 (長さ0.37~0.52cm、巾0.21cm以下)					
41	0.37	0.20	0.10	1.85	" 芒残る
42	0.37	0.11	0.10	3.36	" 虫喰痕
44	0.39	0.19	0.14	2.05	"
45	0.42	0.14	0.14	2.33	" 虫喰痕
46	0.37	0.20	0.13	1.85	" 大振れ
47	0.37	0.20	0.13	1.85	"
48	0.38	0.18	0.13	2.11	" 屑残る
49	0.41	0.19	0.12	2.16	"
50	0.40	0.20	0.13	2.00	" 屑残る
以上1号建作物群					

II-A類 (長さ0.53cm以上、巾0.28~0.37cm以上)

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
4	0.64	0.29	0.19	2.21	芒残る、虫喰痕
6	0.60	0.29	0.20	2.07	" 大振れ
11	0.57	0.29	0.23	1.97	"
12	0.57	0.28	0.19	2.04	" 糠残る
14	0.56	0.29	0.20	1.93	" 大振れ、虫喰痕
15	0.53	0.28	0.17	1.89	"
16	0.55	0.28	0.18	1.96	" 糠残る、虫喰痕
18	0.58	0.29	0.17	2.00	" 芒残る
19	0.57	0.28	0.22	2.04	" 大振れ
20	0.62	0.30	0.20	2.07	" 芒残る
25	0.54	0.32	0.23	1.69	" 大振れ
27	0.57	0.35	0.30	1.63	" 虫喰痕
28	0.54	0.33	0.20	1.64	"
29	0.57	0.34	0.21	1.68	" 芒残る
以上1号建作物群					
1	0.56	0.28	0.23	2.00	"
21	0.53	0.35	0.22	1.51	" 糠残る、大振れ、虫喰痕
30	0.53	0.29	0.22	1.83	"
33	0.55	0.35	0.16	1.57	" 糠残る、大振れ
35	0.53	0.30	0.24	1.77	"
以上2号建作物群					

II-B類 (長さ0.53cm以上、巾0.21~0.27cm)

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
2	0.60	0.23	0.19	2.61	糠残る、虫喰痕
3	0.63	0.27	0.23	2.33	" 糠、芒残る
5	0.62	0.27	0.22	2.29	" 芒残る、大振れ、虫喰痕
7	0.54	0.24	0.19	2.25	" 糠、芒残る
8	0.57	0.26	0.17	2.19	" 虫喰痕
9	0.61	0.25	0.22	2.44	" 糠、芒残る、虫喰痕
10	0.61	0.27	0.23	2.28	" 芒残る
以上1号建作物群					
2	0.53	0.24	0.18	2.11	" 糠残る
以上3号建作物群					

分類外炭化米

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
43	0.36	0.19	0.15	1.89	大振れ、虫喰痕
52	0.33	0.22	0.13	1.50	"
56	0.36	0.23	0.16	1.57	"
以上1号建作物群					
90	0.36	0.25	0.18	1.44	" 以上2号建作物群

炭化小麦 計測表

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
61	0.57	0.26	0.20	2.19	1号建作物群

炭化小豆 計測表

登録No.	長さ cm	巾cm	厚さ cm	長さ 巾	備考
62	0.62	0.37	0.32	1.68	大振れ、亀裂
63	0.55	0.36	0.37	1.53	"
64	0.60	0.32	0.36	1.88	" 亀裂
65	0.56	0.34	0.33	1.65	"
66	0.57	0.36	0.38	1.58	"
67	0.53	0.30	0.37	1.68	"
68	0.53	0.36	0.37	1.47	" 亀裂
69	0.55	0.36	0.36	1.53	"
70	0.55	0.33	0.36	1.67	" 亀裂
71	0.56	0.36	0.36	1.56	"
72	0.50	0.39	0.36	1.28	"
73	0.50	0.32	0.34	1.56	"
74	0.54	0.36	0.34	1.50	" 亀裂
75	0.55	0.34	0.40	1.62	"
76	0.53	0.34	0.33	1.56	" 亀裂
77	0.57	0.31	0.31	1.84	"
78	0.54	0.36	0.32	1.50	" 亀裂
79	0.53	0.39	0.37	1.36	"
80	0.55	0.37	0.34	1.48	"
81	0.59	0.34	0.34	1.74	"
82	0.49	0.38	0.38	1.29	"